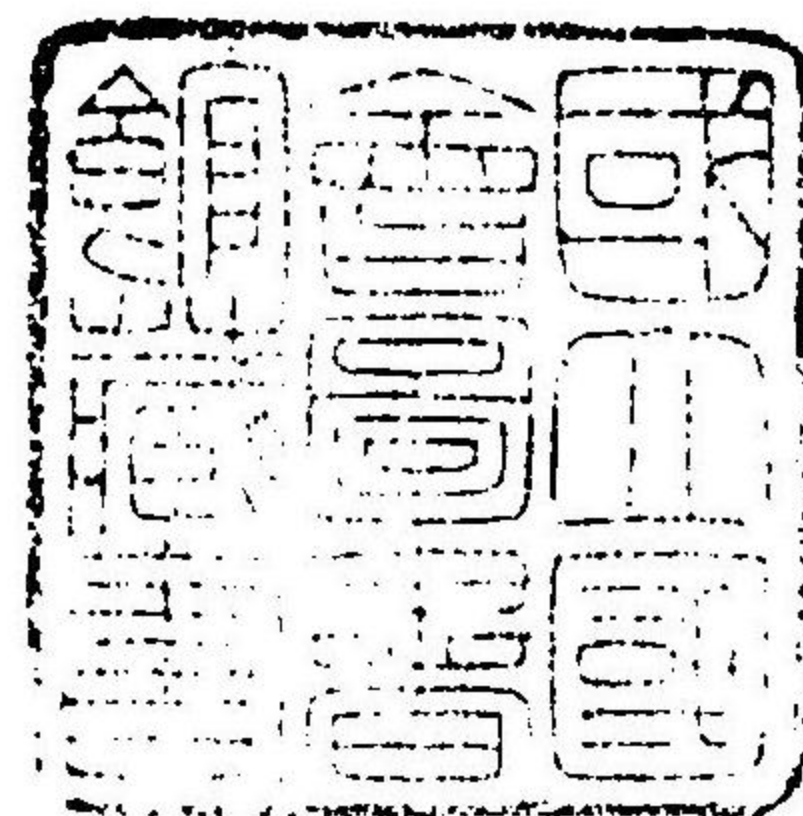
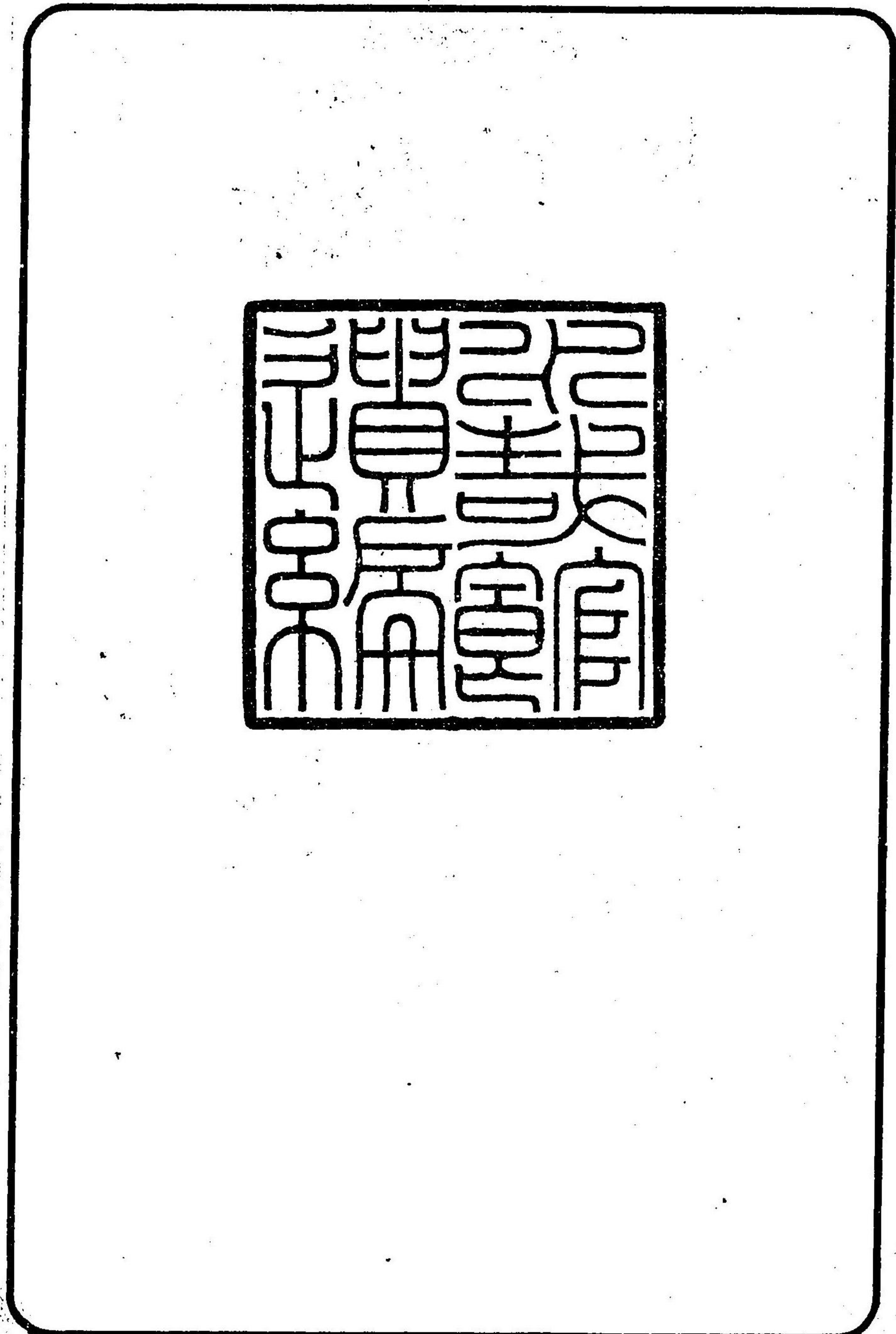


92

上
392
白

首
贅

子



911.109
N341r



337193

つぎにむねむねのいふ病ありてはなほなるる
のまゆ

古のいふ系今世のまをせしつゝあつたをいふに九行れはなるるや
それとてのまをせし今世のまをせしつゝあつたをいふに九行れはなるるや
中世なり 江戸の増えしつゝあつた

つぎにむねむねのいふ病ありてはなほなるる
のまゆ
つぎにむねむねのいふ病ありてはなほなるる
のまゆ

百首贅と自序

やまと歌の集てふものハ夏草の志けりあひてかたわく
るたに心くるしくなんあるか中にあひの百首の巻のみそ
あやしきまて世にひろこりて下か志もまてはひわたり
あしの丸屋のうちさへこれをよまぬをみな子ハあらぬ
かもまたこの歌のことわりをときあかしたる文も天つ
星の數志らすいて來にけるとかやすへてをみな子にい
ひ教ゆることはなれハはかくしうハあらぬをたゝ加
茂のたきなかかきたるうるまなひこそちからふとくし
てひろくかうかへことく證をとりてよくこそときあ

かしけれ志かいあれど力ふときすまひのおのか力にて
みつから倒るゝためしもあり古へにかたよれい今に叶
いぬさゆもいて來ぬへし古への證を棒にふりて世の人
をたゝきふせたる心すゝ見にいまた證なきことをもこ
の棒にことつけてうちなひけぬかくておのれい志らぬ
こといなしと思ひあかりて何くれとことはおほくなり
ぬるそうたてしきすへていあやの文にくらかりし故に
こそあなれなに波かたうちよする老の波の志はくくな
らて一通りの見そなひしける浦つたひよしあしにつけ
紙して書つけつゝ百敷をよみはつるころにいこれもひ

とつの巻とそなれりける歌のこと志らぬものゝいかな
るさかしらそや贅の上の贅ならめといとうとまじきも
のからさすかやきもやられすなむこれを贅と名つけ
て箱の底にかくしつ後じん人のこれをすいゝとやよ
むへきあるはこふゝとやいふらんわれい志らす

百首考

この巻はかりごとわかたなく疑ひおほきものは世にもあらしかし明月記に文暦二年
中院障子色紙染筆自天智天皇至家隆雅經卿といへる一條の外には證とすへきものは
露はかりもふしやすへてふるきは歌ぬしおほくたかへり後の歌はぬしいたかかれと
位つかさのかきさまおほく例に忘たかハす歌の文字のたかひたるもありいつれにも
定家卿の筆とおもほえすふむ今の世に傳はりたる小倉色紙にのみ歌ぬしはあら
すたか書添たるにかこの卿の志らしめしたることにはあらぬにや障子の料ふらハ二
三十首にてもありぬへきをいかて百首とハさためけん文字のかきさま例にかかりて
一文字つゝはふれてするくゝとかきなかしたる筆はふし今の世にてをさふ子に教ゆ
るいろはにほへてふによく似たりこれかれ見そふハすに筆の心はへ一首つゝにかハ
りて一人の手とハみえすふむあるまた色紙の中には反古をうちかへしてかきたるも
ありいかふれハ中院入道のいやくしう定家卿の筆をねかひたるにあさましう反古
の紙出して歌かゝせけん又かの歌とも入ひとりつゝ其生涯第一の秀歌を選び出たる
ものごハ見えす父俊成卿のおほき秀歌の内をとりてさしもふき歌をこれにいれたり

みづからのものかくいひもてゆけの疑ひの限りにこそある人いへらく元龜天正のころ
みやこわたりの兵亂もまつまり主上の近江より歸りおひします月卿雲客も國より
かへりまうてきて世中やとおなしうふりぬるに長き旅のすまぬより歸りきませしか
いよるすの調度なにくれとゆきあはねの家々にひめおきたる物をもおしみあえず
さり出して錢にかへけるされは物かたりの草紙繪の巻物ふるき色紙ふといとおほく
世に出ける其ころ西の京に何かしとて聞ゆる伽羅あき人ありけりかねてはかゝるな
くひの物をもものしけるかめてなき色紙などいよき志ろをゑなとして家とみさかへ
けるか中に賣ぬ色紙こそいとおほくありけれそれいおさふ子の手本とて其親はら
からのかきたる手いよくまれあしくまれをさふこのうつしやすきをせにしてつふら
く書たるあり見はえふき物ふれは手いよきもあれとさらに買入はふしかの伽羅
あき人いさかしらものにてこれをつねにひめおきてひとりあみしておりける其數二
三百にもふりぬるころいてやとていにしへ今の人ごとに唯一首をゑらひ出て百首を
一箱におさめてこれおむ定家卿の小倉の山莊にてかき給ひしふりててもろ人に見
せもやらす伊勢國司かりいきてかくふんとてそのかし聞えける國司これを見て大

ひにめてきはきてかゝる物はこの卿のふかれをくむらん人のうへもふき寶ふめりこ
の手の神さひたるさま今の世にあるへうもふしとて數のなからを出してたはひける
かのさかしらいごとくつきて歸りぬきて國司はこの百首を一雙の屏風におしはりて朝
夕ふかめおりけるある日みやこより牡丹花老人とふらひきてこの屏風をみておとろ
きさひきて世の末にかゝる寶いいつこよりわきいてきにけむ後の世の思ひ出にあは
れ一月はかりもとまりてよく見ほすそのありてんやと涙おとしてうらやめはそれ
いやすきほどのことよこのひごつをかしてむ君か心ゆくはかり見ほしてよ今一つは
またをりかへてまいらすへこのなまふ老人かきりなく悦ひてかりて歸りぬこの後
いくほどもふくて國司ほろひにけりその時ひとつの屏風もともに烟と立のほりにけ
りこのころまてみやこにていさしも去りたるものはなかりしをこなたひたか聞つたへ
けむあたら世の寶のうせにしとてなけくもありまたはその半は牡丹花かもにあり
ふさといひさかくをここのむ上達部衛府のつかさふと我さきにといきてみるありみ
たる人とに一首つゝ取ていぬめり牡丹花は涙こほしておしめともごたのかものに
しもあらずぬしふき寶ふれはあらそふへくもあらずひと日ふた日かほとに屏風はむ

ふしくそふりにけること、かしこに今の世まで傳はりしこの色紙にてそ有ける國司も牡丹花も眼のあきらかあらざりしにやかのさかしらにぬかれにけりそあむされこの百首をかきつらねて一卷とあして歌ぬしを書きへたるはこれなうりにいさし時の目録にてそあるへきみあかのあき人のさかしらなればたかひたる事ともいさるへきにやもつてふ數もかれおほるけにさためけらしそもくをさふ子の手本の手ぶらふためにて歌にいさしも心あらずされハ親はらからのこれをかきてつかひすにいやしくし集なんどとり出てかくものにはあらずな、何とあく耳の底にさまりたる歌をうちすして筆にまかする物ふれハ文字のなかひなるもあるへしかんふの心ゆかざるもおよそ歌の姿すあほにてたけたかくさらくとよみくたして心ゆくやうあるハみあよき歌にこそ誰か耳にもさまりけれされハこの百首ハみあよき歌あるそなか中にもわる歌のまじりたるもあれとそれハ心と葉の疵にてこそあふれ姿ハ皆よかりけれハ耳にいとまりけらしこそさくからめきたる歌くすしめきたる歌かみまものつゝきおほつかふくて空にはおほえかたきやうの歌ハひをつもこの巻にハあらずかしされハみあよき歌ありとそいふめりこれそ巻のはからざるよき歌へあるへし

また手本ふれハ反古をかへしてかきもすへしかくてもろくの疑ひハ春の氷の日記にあたりたるやうにあんひたくごけつまぬされかくいひし人を誰とこも聞かためたることあしまた外に證もなけれハ疑ひもて疑ひをことわるにてこそありけれまことあかりやあらずや

百首贅と

履軒中井先生遺書

秋の田のかりほの庵の苦をあらみ我衣手の
露にぬれつゝ 後選 題志らす 讀人志らす

此ハ貫之ヨリ後ノ人ノ歌ナルヘシ天智ノ御製ニ非テハ淵ノ説明白也萬葉ニ

秋田川借庵乎作吾居者衣手露置爾家留

コノ歌ヲ取テ後選ノ作者ガソノ時ノ風ニヨミカヘテ我歌トナセル也尤ヨキ歌也詛文アルニハ非但かりほの庵ノ句如何トハ思ヘド作者ノ心コハ穂ヲ刈ンガタメニ作リタル庵也ト思ヒテ刈穂ノ庵トツマケタルナルベシ違タルヲアラバ作者ノ過ニテ歌ノ流ニモ非又萬葉ニアハヌトテ深ク咎ムベキコトモ非此卷ノ流ニナルコトハ少モナシ至テ俗説ニハ定家卿古歌ヲ引直ノコノ色紙ニ書玉ヒシナド云ハ甚シキ惡説也辨ズルニタラズ

苦をあらみトハ苦ノ疎粗ヲ云ナリトトみト兩字相照ノコノ意トナル古ノ成語ナリ
何事ノ上ニテモ云フ也風といたみノ類皆然リ淵ハト含テ只みノ一字ニテ解テ若テカシマシク云ハ如何ニツヤ古語ニ精キ人ニ似合ハザルコト也

凡コノ百首ハ百枚ニ離ルル色紙ナレバ前後ハモト無コト也題名モ色紙ニハナカリシ定家卿ノ筆ト云モナホツ

カナキト也後ノ人コノ色紙ヲ聚テ寫ノ一卷トナセシヨリ前後ノ次第モ出来タル也コノ時題名モ添タレハ謬誤多キナリ皆筆者ノ知タルコトニ非モロク卷頭卷軸前後次第カ、リタル説々ハ皆ワロシ世俗ノ陋説ナリカ、ルコトヲ定家卿ノ意ヨリ出タリト云ハイカナルコトツヤ淵モコノ陋タイマズ免レズ

此歌ハ只田家ノ秋景ヲ述タルノミ也モトヨリ實景ニ非我トハコノ庵ニ宿シタル人ノ我ナリ作者コノ宿シタル人ニナリテ自ラ我ト云也カ、ルコトハ歌ヲ好ム人ノ常ナリ今時ノ題詠ト替リタルコトナシテ卷頭ノ歌也ト思ヒテ謬説マズク多シ

萬葉第一往紀溫泉時御歌

中皇命

わかせてはかりいほつくらす萱なくは小松か下の草をかりさね

天智ノ秋田ノ御歌ハ此歌ト贈答ニ似タリ考ヘシ

春すきて夏さしけらし白妙の衣はすてふ
天のかく山

コレモ持統ノ御製ニハ非又選集ニ入ザレハ誰ノ歌コヤ知カタシ

萬葉ニ藤原宮御宇天皇御製

春過而夏來良之白妙能衣乾有天香來山

先コノ御製ニツキテイフニ人家ニ去年ノ秋ニ夏中着タル夏衣ヲ濯ヒ摺テ納置タルヲ今年夏來ニヨリ又着ベキ

ニ先取出ノ日ニ曝ノ微チ除キ臭氣ヲ去ハ定リタルコト也是首夏ノ景物ナリ六七月ノ虫干ニハ非ソレハ冬衣ヲ乾ナレハ夏景ニ叶ハズ白妙ハ絹布ノ別也ナヘテ白妙ト云也然レ此ハ首夏ノ景物ナレハ白布ノ衣ヲ指也古白布ト云也楮ナリ譌文考テトモヨム

香山ハ犬山也大和河内ノ疆ナル葛城二上龍田金剛山ナト一帶ノ連山ノ總名ナリ甚ノ勝景ナレハニヤ香山ト名付ケラシ萬葉ニ同ク御製アリテ中ニ海原海鷗ノ句アリ證トスベシ大和ニテ茅渟海ヲ望コトハコノ一帶ノ山ヨリ外ニハナシ猶下ニ云ヘハ畝火耳無ナドノ小丘ニテカ、ル眺望ノ勝景アルベキヤハソレヲ俗稱ニ隨テ畝火ヨリ更ニ小キ丘ヲサシテ香山ナリト淵モイヘリ甚シキ謬ナリ萬葉ニ精キ人ハカヘリテカ、ル過アルモノニヤ香山ハかくはしき山ト云フ也勝景ヲ賞美シタル詞也實ノ芳林ニハ非芳野山ノ芳ト同シ俗稱ノ香山ハ古ノ日本山ナリ凡山ノ名ニ天ノ字アルハ皆高山ナリ人皆空ヲ仰キ望ムユヘ自ラコノ名ノ出来ナリ漢ノ北狄ニモ天山ト云高山アリ

コノ御製ハ香山ニ白雲ノカ、リタルヲ宮中ヨリ容覽マシクテ詠玉ヘルナルベシ首夏人間ニ白キフルカタビヲテ乾テ暑日ノ用意スル時節ナレハ山モノノ心ニテヤ白妙ノ衣ヲ乾掛タリトナリヨキ見立ト云ベシ難波浦ヨリモコノ山ノ雲ハ常ニ見ユル也マシテ大和ノ皇宮ヲヤ

白雲トハ誰人ノ解コヤ古クヨリ云フコトナラソレヲ非トイヘル人コソ眞ノ非ナラメ

雲ハイツモアル物ナレド夏ハ特ニ盛也詩ニモ夏雲多奇峰ナド作レリ難波ニテワガ天樂樓上ニテ朝夕雲ヲ見テ樂ミシハ香山ノ雲ナリケリカ、ル樂ミハ東夷人ノシラヌコトナルベシ

サテ衣はすてふノ歌ハ右ノ御製ヲ本トシ後ノ人ノ詠ケル也來良之ヲきにけらしト改メテ又ほすてふト云テ我歌トナセル也コレモ山ノ雲ヲ望テ古人ノ衣乾トノ玉ヒシハケニヨクモ當レルカナト山雲ニ就テ古歌マデヲ賞シタル也今ノ世ニテイハ本歌ノ文字ヲ多ク取過タリト云ベシサレトソレハ歌合ナリ勝負ヲ競フ時ノ非難ナルベシ古ハ此ヲ純トハイハザリケラシ此ヲ御製ノ訛寫也ト云ハ非也定家卿ノ改竄ト云ハ猶更ノコ也

附考 左ノ外三山歌アレモ本文ニ高山ト書タルニ後ノ人ウクヤまト訓テツケテ香山ト書フハイカナルコト也ハバ

天皇御製登香具山望國之御製歌

山常庭村山有等取與呂布引マハハコトタルヤウ天乃香具山高キ山故ニ天ト稱ス小キ丘ニハ稱スベキヤウ騰立國ナシ世俗ノ誤ハ香具ヨリ起リタルコト知ヘシ

見乎爲者高山ニ非ハ一ケ國ノ中ヲ眺望スルコトハナラズモノ也小キ丘ノ上ヨリハ僅ニ近國原波煙立籠陸地ト云テ下ノ海原ニ對

海原波眞ノ海也コノ山ヨリ西方ニ見加萬目立多都海鷗アリ山上ヨリコク見ユル也コノ海濱可憐國曾蜻島八間ハハレ

跡能國者是謂洲ノ中ナル大和ノ國トイフ葦ナリ島洲ノ二字毎ニ相通ノ用ユルハ例也大和ヲ中ニ西ハ長門東北ハ津經マテノ地勢ヲ見立テ

香具ハ西山ノ大名ナレハ取與呂布トイヘリ又登トイヘハソノ中ノ葛城ニテモソノ他ニテモ最高キ一所アルベシサレド今ニテハソノ所ハインゴモ知ラズ又強テ求巨

同藤原宮御井歌

八隅知之和期大王高照日皇子麗妙乃藤井我原爾大御門始賜而埴安乃堤上爾有立之見

之賜者日本乃日本ハ山名ナリ山ノ字下ニア青香具山者青香具ハ賞辭也昔ク美ナル日經乃春山跡之美佐備立

有畝火乃柴美豆山者日緯乃大御門爾彌豆山跡山佐備伊座耳爲之之ハ乃ノ訛青菅山者背友

乃大御門爾宜名倍神佐備立有吉野乃名細コノ二字モト吉野ノ上ニアリ文例ニヨ山者影友乃大御門從

雲居爾曾遠久有家留高知也日之御蔭天知也日之御影乃水許曾波常爾有米御井之清水

日本乃日本ヨリ三ノ山ニ持大御門爾ト書テ吉野ノミ大御門從ト書タリ別義アリトハミエス從ヨリトヨムベシヨトヨミテハ其義通

畝火乃日本ヨリ三ノ山ニ持大御門爾ト書テ吉野ノミ大御門從ト書タリ別義アリトハミエス從ヨリトヨムベシヨトヨミテハ其義通

耳爲乃日本ヨリ三ノ山ニ持大御門爾ト書テ吉野ノミ大御門從ト書タリ別義アリトハミエス從ヨリトヨムベシヨトヨミテハ其義通

三吉野乃日本ヨリ三ノ山ニ持大御門爾ト書テ吉野ノミ大御門從ト書タリ別義アリトハミエス從ヨリトヨムベシヨトヨミテハ其義通

青香具山者 日經能 大御門爾 春山跡 之美佐備立有

柴美豆山者 日緯能 大御門爾 彌豆山跡 山佐備伊座

青菅山者 背友能 大御門爾 宜名倍 神佐備立有

名細山者 影友能 大御門爾 雲居爾曾 遠久有家留

舊解日本山室原並ニ明ナラズ蓋日本山ハ山名ニテ即青香具ノ本名ナリ室原ハコノ山下ノ地名ナリカクアレ

ハコノノ歌ノ明證ト謂ベシ

萬葉第十一卷寄水歌

以のモとむるはらの毛桃もとまけみわかおほさみをならはばやまし

四條ニ別ナタルハ四門ニテ四時ヲ述タルヤウニ見ユレド實ハ西ハ無ノ南ハ二山重複セリ代攝ノヤウニ思ハル

、也コノ時ニ西方ニ門ハ無リシニヤ若西門アラバカナラズ天香山チ出ノ秋山ト稱スベキナリ也

淵ノ俗説ニ惑ヒシハコノ青香具ヨリ起リタルコト然ルニ此ニ青香具トハイヘド天ノ字ナシ青ノ字ヲ添テ又山名ナラヌ處ニ出タレバ山名トスベキイハレナシ下ノ青菅ニ對シ見レバ其義益明ナリ右ノ如ク引連テテ文例ヲ考フレバイカナル愚鈍ナル人ニテモコノ義ハ曉達スベキ也彼等ハ古書ヲ好ミ萬葉ヲ修ルトイヘテ講明證定ノ功ハ乏シキニヤ

三山ノ歌ハ證トハナラズ別ニ論ズベシ

足曳の山鳥の尾の志たりをのなかくし夜を
ひとりかむねむ 拾遺 八九

コノ歌人應ニ非ト淵云當否イマズ明ナラズ

山鳥の志たり尾ト云テスミタルコトナルチ歌ノ調ナレバ中ニをのノ兩字ヲ重複ノ置タルナリ此ニハ是非ノ論ナシ尾ハ微末ノ義ナレバをノ假字ナルベシ近世おトカクハ古義ニ違ベシ

足曳モトハ山ノ險路ニ泥ミテ足チ引ヅリテ歩ムコトナレバ險難ノ山チ足曳ノ山ト云シナリ用ヒ來テ冠辭トナリテ後ハ險難ノ義ハ用ナシサテ外ノ諸説ハ皆アヤシ

志たり尾ハ垂尾也志ハ發語也無ニ論ナシ

垂ノ字たるチ本訓トスたれ也たりハ通音ナレハ語ニヨリテカハルコトハアレハ同義ナレバ疑ハナキコト也タトヘ

ハ傾ノ字かたふクチ本訓トス上下ノツヅキニテかたふき也かたふけ也かたふか也垂モ此ニ同シ何ノ秘傳カアラシ淵ハ別ニ志たらしト云語ヲ設テサテリハ良之ノ約也ト云甚迂遠ナリヤ反テ良之ハリノ延タル詞也ト云テモヨカルヘシ且モ志たらしト云詞アラハ即志たらしノ義ナルベシらしらすハ此ヨリ施ス詞彼ノ自ラナルコトハ替リアルベシ古ノ詞ハ心シテ見ルベキコトコソサラデハカ、ル過ハ多カルベシアナガシコ私智チ舞ス萬葉ニハ四垂ト書タリ然レハリモレモ後人ノヨミクセ也心ニマカスベシ爭匠四垂尾ト書テ志たらしをトヨミテモ志たれトヨミテモ是モナク非モナシ全ク同義ナリ

亂尾モみたれをトみたりをト同義也並ニ彼ノ自ラナリ亂チみたすトヨム時ハ我ヨリ施スコトれりトハ替レリ國チ亂スノ類是也然レハ風吹みだすトハ云ベシ風ノ施ナリ吹ミだるトハ云マシキコナルチ和歌ニ多ク見ユタルハ皆謬ナリ萬葉チ讀誤リタル人ノ謬チ傳ヘタルナラソノ外國をみだる世とみだりナド世人ノ言ニ多クアリ此モ寸志ナラデハ叶ハヌコトナリ

なかくし夜ハ長々シキ夜ナリ外ニ説チ作ルハアヤシ

ひとりねんかモト云意ナルチかモチ引上テ上ニ置タル也下ニアルベキヤハチ引立テ上ニ置タルト同義ナリかモチヨソハ哉ノ字ト同シかモトニ字ニテ一義ナル詞ナルチかチ疑トシモチ助也トイフハ至テ古語ニ開キテ也精クイヘハ漢文夫ノ字チカナトヨムコトアリ又乎哉ノ二字チかやトヨムコレチモかなトヨム人モアリ哉ハ歎義ニテ疑處ニモ用ニ疑ナク決定シタル處ニモ用ユ上ノ文勢ニヨル也夫ハ心ニ疑ナクテ詞ノ上ニ疑チ帶ダリ乎哉ハ夫ニ似テヤ、替レリカクハアルマシキコトイカデカクスルコトガヤト歎スル處多シ又イカデサルコトアル

ベキカヤト歎スル處モアリイヅレコテモカモト全ク同義ナリ漢文ノ助語ヲヨク知ラチハ和語ニ解ガキト多シ俗語ニカハイト云詞アリ此歌ノカモニヨク叶ヒタリ即亦乎哉ナリこの長さ夜を唯ひとり獨寐をすることかひのト俗調ナラバイフベシ

たこの浦にうち出てみれい白妙のふしのたかねに
雪のふりつゝ

萬葉 望不三山作歌 赤人
朗詠集

萬葉 田子浦從打出而見者真白衣不盡能高嶺爾雪波零家留

浦トイヘハ必海濱ノ地名ナリ山谷ノ間ニ浦ノ名ハアルマシ古歌ニ盡みれどわかぬ田子浦ナドヨメレハ定メテ打開ケタル勝景ノ地ナルベシコトニ到マデハ丘陵ニ隔テラレテ富士モ未ミエザリシニコノ浦ニ出テ初テ富士ヲ打望タルハエモイハズ面白キ也淵ノ解ニテハ富士ヲ望タル地モ田兒浦ナレドソレマデノ山陰ノ儀傳ノ道モ同ク田子浦也ソノ山陰ヨリ打出ル也歌ノ田兒ハ富士ヲ望見タル田子ニハ非トイトムツカシク云タルハ萬葉ノ從ノ字ニ泥タル故也從テ也トヨミテよりノ義トスルコトアリ然レモコノ歌ハナラデハ叶ハズトヒ從ト書テモトヨムベシ山陰ノ説ハ用匠上ニ引御井ノ歌ニ影友乃大御門從ト書タルにトヨマデハ通ゼズカクイヘハ一人ノ臆斷ニテ古讀ヲヤブル也ト云人アルベシ左ニハ非萬葉ニ從テ也ト云タル所モアリ又ニトヨミタル所モアリ三井ノ歌ニ大御門爾ト云句ヲ三處連テ置タリソノ末吉野山ノ處ニハ大御門從ト書タリコノ四句ハ全ク同義也從ノ字モトヨマデハ叶ハズ也ニテモよりニテモ一向通ゼズト也證トスベシ

うち出て、うち出て、イヅレニ書テモヨム時ハ一ナリ歌ハ吟咏ノ物ナレバうち——ト音ヲ長クヒケバソコニテイノ音ハ自ラ出ル也故ニ直ニテニツク也然レバイモシハ書テモヨシ書ズトモヨシト云ベシ但書體ニテイヘハイナ書タルヲ正法トスベシコノ類ヲ散樂家ニテ文字移リト云打出てモトヨリ然リ又何々シケル——ウツるトウタフニルヲ引テラノ音コナレバ下ノウチ躍ラヌ善トス

文字移リアル句ハ一字餘リテモ字餘リノ句トハイハスゴヨキ又文字移リアル句ニ五字七字ニテハ文字不足ナルニエツザクヤスメ字ヲ置ト也——ノ字ツチニコノ用ニ使フコト多シカ、ル古語ヲ知ラズノイノ字チカ、ヌチヨシト云ハ萬葉ノ假字ニ泥ミタル人ノ頑ナリ又うちて、ト唱フヘシト云ハ更ニ頑ノ甚キ也試ミシ聲ヲ緩フノ節チ付タルヤウニコノ歌チ吟ノミヨチノ字ヨリイノ音ノ出コヌヤウニトハ如何ニ心ヲ用テモ叶ハヌト也又イノ音ノ出ヌ先ニ舌トニ急コトリツケテ讀ナラハ聲ツマリテ吟トモ唱トモイハレヌモノナリ凡古書ヲ解スルニ全ク證ナキコトナラハ非也トテ絶棄ルツヨキ各證アラハ各存スヘキト也ソレナ多分ニ付テ證ノ多キ方チ必善ト云ハ和漢トモニナキト也

萬葉ノ真白衣ハ衣志乃きぬトヨムベシ衣志乃にそトヨムベシトハ思ハレズソノ故ハそノ上ニハ假名ナシ假名ナキモ助字ヲ添テヨム例ハアレト正シクにそト二字連リタル助字チ一字ヲ書テ一字チ省クコアルベキヤハ萬葉中ニコノ例ナシ從匠

衣ノ讀多クハ清聲ナリ衣通姫御衣掛又ハ袖ノ訓皆是ナリ後世御衣おんろト濁リテヨムコトモアレト古ハみそノ清聲ナリチノ濁聲おんヨリ出タル濁ナリ本音ニ非且常語ニテ歌ニ非レハ證ニハナシガタシ萬葉ノ助字モ

世の中梅か枝ナドノのかハ字ナクテモ添テヨムベシ今ノ世ノ歌サヘカ、ルヲアリムツカシク常ニアラヌ詞ニ
ハミダリニ添ガタシ後人ノ心ニ任セテミダリニ添ナハイヅクマデトノ限ハアル叵又假字ノ清濁モ大概ニ論ズ
ベシアマリニ泥ミタラバ又誣説生ズベシ

白妙のノのハ一句ヲ打越テ末ノ雪ニ續ク文字ナレバ難ナカルベシ富士ニ續クコハ非

是マデ日比零續テ積タル雪ノ意ナレバつゝト云也是モ難ナカルベシ訛字ナンドイフ説ハ甚アシ、人丸亦人ハ
歌仙ノ振萃ナレバ古法古例ニヨラズ種々高妙ナル詞ヲ胸中ヨリ吐出セバ外ノ歌ノ例ヲ以テ後人ノ何カト難付
クルコハアルマシキコト也

朗詠集及ヒ諸書ニコノ歌ヲ載タルハ皆コノ卷ニ載タルト同ケレバ此卷ニハ朗詠ヨリ入タルナルベシ萬葉ニカ
、ルコトハ非萬葉ニ泥ミテコノ歌ノ文字ヲ正サントスルハ大ナル僻事也古歌ヲ聞傳ヘタルハソノ傳ヘ幾筋モ
アルベシ

又萬葉ノ從ノ字ヲ是非トモコトヨマデハ叶ハヌトイハハソレニモ同義ナルベシうち出て田兒の浦よりみれ
はト云心ニテ田兒の浦也打出てみればト下ノ文字ヲ上ニカ、ゲタイフ也是ハ拗語ト云モノニテ常ニモ多クア
ルコト也イツレニテモ不二山ヲ望タル處チ田兒浦ト心得ベシ

奥山にもこちふみわけ鳴鹿の聲聞時を
秋はかなしき 古今 是真親王の家の歌合の歌 讀人志らす

猿丸八人モ時代モシレズトカヤ此モ後人ノ書添タル物ナレハ論ナカルベシ

鵲のわたせる橋におく霜の志ろきを見れば
夜そふけにゆる 新古今 題志らす 家持

コノ歌萬葉ニ載ザレバ家持ニ非ト淵イヘリサモアルベシ

鵲橋ハ七夕ノ故事ナレバ男女ノ間ニ限リテ用ベシ世ノ常ノ冠辭トハ云ガタシコノ歌天子ノ御製トミレバ甚ヨ
ク通ズ歌合ノ時ノ御製ハ女房ノ歌ト題ノ出ルモノト聞ナリ然ハ讀人志らすト書タルチ後ニ誤リケラシ弘徽殿
承香殿ナド女御達各ワカレ住玉ヘバソコニ往來ノ廊ハ細ク長ク高ク橋ニ似タル物ナレバヤカテ橋ト云テ故事
ニ合スナリ階モはシトハヨメド此ニ叶ハズコノ廊チ天子深夜ニ歩ミ玉ヒシ時ノ趣向ナラバヨク叶フベシ常人
ニテモ件ノ往來ニ池川ノ真ノ橋チ渡リテカク詞チ設タリトミテモ大抵ハ叶フベシ忠岑ノ夜はにふみわけノ歌
ハ臨時ノ敏捷ヲ賞ノヨシ實ハ故事ニ叶ハズ禁中ヲソケモノナクテミダリニ鵲橋ト稱スベキヤウナシ忠岑ハタ、
コノ歌ヲ躡テ詠タルノミ故事ニハ離レタリ

唐詩諸公主山莊應制ニ鵲橋ノ故事ヲ用ヒタリ外ニヨキ故事少ケレバ此コソ相應ノコトナレトテ誰モく用ヒケ
ラシ實ニ當ラヌコト也夫婦ニモアラヌ男女ニテ特ニ父子兄弟ノ間ナルチ牽牛織女ニ喩タルハ無禮ノ甚シキコト也
ソノ時ノ人ハサモ思ハヌコトヤ

萬葉ニモ故事ヲ離レテ鵲ヲ常ノ枕辭ニ用タル歌カレコレアリヨキ歌ニハ非ト知ベシ學ブ叵

天の原ふりさけ見れハ春日なる三かさの山に
出し月かも 古今 ちろこしにて月をみてよめる 仲麻呂

土左日記ニ首句ヲ青海原ト書アリ

仰見ヲ振放ト云ハ凡高キヲ望コハ面ハ上ニ仰キ身ハ後ニ退ヤウコナルモノナレバカク云ナリ萬葉ニ又仰ノ
字チモ用タリ仰チ俗ニあはのけハあはのくハイフコノのけ即さけナリ振避ト書ヘキチ萬葉ニ何故ニ避トカ、
ザルニヤ

放ハ彼ヲフリステ、我ハ退ノ意ニテ略通スレハ仰ノ的當ニシカス

こゝよりさけはなれ遠さをいふト淵ハイヘドソレニテハ詞ノ主客ヲ失フ也よりさけトハ我ヨリ彼ヲ避離ルハ
形チイフ也彼ノ我ヲ避離ニハ非故ニ遠き月を見るトイハズノふりさけ見ト云ナリ空なる月トよりあはのきて
見れハト云心ニテヨク通ノ疑モナキコナルヲ離レ遠サカリタル月ヲ見ト云ベキヤウナシ語路ノ主客順逆ハ明
カニ知レタルコナルヲ古書ニ熟シ萬葉ニ精シキ人ノイカデカクハ謬リスラン

淵ハ古今ノ古註ヲ憎ミワザ／＼ト土左日記ヲ引タリ理アルヤウナレドアマリ一概ナルコト也古注ハ後人ノ筆ナ
レバ疵モ多クレハ只コノ歌ノ一條ハ全ク日記ヲ抄出シタリト見ユサシテ憎ムベキ疵ハ見ユズモシ疵チイハレ
日記ト同シ

コノ歌ハ一向ニ古今題ニ打マカセタルゾヨキ題ノアマリ簡古ナルヲ残り多ク思フ人モアルベケレドソレハ選

集ノ理ニ闕キ故ナリもろこしにて月を見てよみけるノ外ノコノ歌ニハ少モ用ナシ譬へハ遣唐留學ノ用
ナシ數十年居タルコト用ナシ明州モ用ナシ饑モ用ナシ詩作り別ヲ惜モ用ナシ古今及ヒコノ卷ニテハ海サヘ用ナ
シカハル無用ノコトヲ選集ノ題ニ置ベキカハ古今ニ長キ題アルハ業平唯一人ナリ是ハ格外ノコトナレバ例ニハヒ
カレズ

日記ヲ除テミレバコノ歌イツクニテ詠タルヤラン知ガタシ若クハ唐ノ帝部長安ニテ詠タルコトモアルベシソ
レニテモ歌コサハルコトナシ

土左日記ハ信シカタクキ書ナルヲ深ク信ノ貫之ノ親筆ト思ヘリ故ニ種々シダ／＼シキ説ドモ起リテ煩ハシキ也
タトヘハ青海原ヲ吾心ニハ善ト思ヘド又天の原モ捨ガタクテ大ニ困ミタル類也

天の原青海原イツレコトモコノ歌ニ害ナキヤウニハ見ユレド天の原ヲ正トスベシ青海原ハ大ニ劣リタリイカ
ニトナレバ青海原ニテハ月ノ出ヲ見タル時也月卑シ海廣大ナレバ少シ仰見姿ハアレハ振さけノ句力薄シ天の
原ニテハ月高シサシ上リテ中天マデノ時ナレハ振さけノ力ツヨシサテ三笠山ヨリ出タル月ノカクハル／＼遠
キコノ土ヲ照スコトカト驚クハカリノ情今日ニミルヤウニ聞ユル也月ノ出沙コトモ照サヌニハアラテモコノ情
又薄シ

コノ歌ノかモモかいのコトヨク聞ユル也前ニ出タリ疑トノミテハ詞滞ルベシ

コノ歌ノ右ナル解ニ年を経て後さらに仕へて官位進ト云ハ謬ナリ此ハ上ニ引タル舊唐書ニ上元中擢衛爲左散
騎常侍鎮南都護ノ文ヲ譯セルナレドモ唐書ニ新舊アリ互ニ得失アリ特ニ外夷傳ハ危脱甚シキモノ也偏ニ信從

ス巨コノ處ハ新唐書モ同ク謬ダレハ擧ルニタラズ蓋肅宗上元元年ハ祿山ノ亂ヨリ五六年ノ後ナリ仲滿ハ海邊ニ吹返サレテ南方ニ流浪ノ終リタレハ上元ヨリ前ノコナルヘシ再長安ノ都ニ往テ仕ヘタルト云フ曾テ無コト也散騎鎮南ハ死後ノ贈官ナリ其漂流窮死ヲ憫ヒ且外國ヲ柔懷スルノ術也トゴノ例多キト也今唐書ノ謬ヲワザクカキ傳ヘズトモヨカルベキト也

淵ノ謬ハ土左日記ヲ深ク信スルヨリ起レル也萬葉ニふりさけテ振仰ト書タル處モアルヲ淵ハ是ヲ證ニヒカズ巴ガ説ニ妨アル故ナルベシ蓋振仰ニテハ青海原ニ相應セストテ棄タル也此ハ私心ト謂ベシ凡證トハ後人ト共ニ觀テ講明スベキ料ナリソレニカク私心アリナハ外ノコモチボツカナシスベテ私心ヲ挾テ後學ヲ誑スハ講學者ノ大罪ナルベシ

附考

土左日記之信シ難キヤウハシサク煩ヲケレハ只コノ解中ニ引タル一條ナイハン
むかしあへのなひまるといひける人

仲麻呂ハ雋才高名ノ人ナリ特ニ遺唐ニ付誰シラス者ナシ唐ニテモ榮顯ノ身ト成タレハ國人ノ羨ムヲ限ナシワカ國ノ榮ト思ヘリ死後承和ノ贈位モ目ヲ驚カスハカリ也カ、ル人ヲカクウトクシシハ云マシキトナリ貫之ノ筆トハ思ハレズトヘハ序記ノ類ニむかし紀の貫之といひける人トイハ、今ノ人ハ笑フベシ

か此國の人馬のはなむけし別れをおしみてかしのから歌作り

舟出ニ馬ニノルベキヤハイカニ饑寒ナレバト馬ノ鼻向トハアマリニ心ユカザル詞也今ノ世ニテモコノ詞

アルハコノ日記ヲ據トスルナランアサマシキト也何トナリトイフヘキ詞モアルベキナ

明州ハ東南ノ海濱ニテ長安ノ都ヨリハ數千里ヲ隔テタレハ京ナル詩友王維李白ガ送來ルベキヤウナシコ、ニテ酒飲ナドシタリトコノ地ノ賤人吏目ナドニヤアランソレガ作タル詩ハチボツカナシ又舊知ニモアラス人ノ別ヲ惜ムベキヤウナシ又カラ歌ト云ニコ、カシコノ差別ハアルマシキト也逆旅主人舟方役人ノ詩作ハ盛唐ノ世ナリト返ス〜片腹イヌシヤコ、ハかの國の歌つくりナド云ベキニヤ或ハから歌トノミカふかまるれぬし

コレハ後世ノ詞トミエタリ軒齋ノ號ニハ續クベシ名諱ニハ續カス詞ナリ然ルニ今ノ世ニテモカク用ルハコノ日記ニ據タルナラン今ハセンスベナシ貫之ノ筆トハ思ハレズ

都にて山の端に見し月ふれと海より出て海にこぼれ

イト拙キ歌ナリ貫之ノ口ツキニ似タルコトモナシ此ハ仲麻呂ノ歌ノ次ニ出サル、モノカハ

六帖ニ載タルコノ歌ハ二句トモニ波トアリ海トハナシ少愈ルニヤ

我庵のみやよのたつみをかそすむ世をうち山と
人はいふなり 古今 題あらは 春選

我コ、ニ庵ヲ結テ長閑ニ樂テ居テ世ノ人ハ知ラズノ世ヲ恨テ此ニ入タリト云フラスナリトノ意ナリ我ハ世ヲウシト思フ心ハナキチ地名ニツキテ人ハサマ〜ト云モ反テ興アリトモ云ベシ

花の色はうつりにけりないたつらにわか身よにふる
なかめせしまに 古今 題あらず 小町

うつる此コテハ衰也落ニ非色うつるトイヘルチ色落ト解スベキヤハ况女ノ顔色ニ喩ヘタルチヤけりハ漢文ノ
矣ノ字ニアタルナハ言チ抑ヘテマシカニイヒサダムル辭也人チ詰ル處ニモイフちさきなきノ類是ナリ此トハ
少替リアレトシカト言ヒ定ル口氣ハ一ナリ俗ノ詰辭ニ汝ハカク巧ミケルヨナコノ句ニ歎意アリトイハ、可ナ
リナチ歎辭也ト云ハ文旨ノ至リ也

いたつらハ徒ノ字チ用ニ空ト似テ同カラズ外ノトニカ、リテ時チ失フチ徒ト云徒費光陰ハ無益ノトチ作テ日
チ費ス也又無益ノ働チ徒勞ト云空ハ手チ束テ時チ失フ也空過一生ノ類也同カラヌトチ知ベシ死ノ事ハ空ノ字
當ルベシ徒ノ字チ用ルモアレド又沈淪零落チモいたつらトイハ死ニ的當セル文字ニアラズ

なかめハ睨ノ字アタルベシ流目なかしめノ略ナラン眼睛チヌエタルヤウニ尻目シテ居ルハ憂アリテ沈吟スル時必
アルト也なかめ居ると云詞アリながめがちト云詞モアリ皆憂思沈吟チ云ナリ

世によるなかめトハイヘド世上ノトニ交ルニモ非唯一通りノ人事人情ノ上チ云畢竟ハ女ノ幽思チサス也俗ニ
シロく目ト云フアリなかめニ當ベキヤ後世花チ觀テなかむると云トハ大ニ異也混ス臣

世上一等ニフル長雨ノ間ニ花ハ衰タルヨナト云チ歌ノ表ノヤウニシテ裏ニハ吾幽思沈吟ノ間ニ顔色衰ヘタル
チ云詩ノ比體ニ似タレトわか身ノ句アル故比トハ定メガタシ

或曰歌は二重三重の心とそふるのたけあしく心もおどりと覺ゆるものなりた、曲ひとつとこそあはまほしけ
れコレハ誰ガ言ナルヤ尤ヨキ效ナリケリ然ルニ是コ男女チ別タザルテ殘多キト也抑女ハ何事ニヨラズナダラ
カニヤサシキチ宗トスレバ歌モ只ナダラカニイヒツケテ男歌ノ如クヒシトイヒカタメルチ嫌フ也故事
チ用ルモサシテソレト聞エヌヤウニ少ヅ、言ヒ掠メテ其意チ思ハスルナリサレバ心ハ二重ニモ三重ニモナル
ベシ縁語モマス、多クナルベシ

貫之ナドノ姿ハ雄々シキトモ云チソロシトモ云テカ、ル歌ハ吾口ヨリ出スベキモノハ露思ヒヨラヌトナリ故
ニ女歌トテ別ニ一種チ立テ後ソノ歌ノ褒貶チナスベキ也サテ小町ハ女歌ノ最上ニテ言ヒ掠メノ元祖ト云ベシ
男歌ノ業平ニ對スベキカコノ歌ナドニ貶意チ思フハ愚ノ至リナリ新古今集ノ前後ニテハコノ女歌チ崇ヒテ男
ニテモスベテカノ言掠チ學ビテ二重ニモ三重ニモ心重リテ何クレト物數多クナリスレ故ニヤ序歌モ廢レ枕
辭モ好マヌトナリテ人丸業平チ學ブ心ハ露バカリモナク偏ヘニ詞ツキノナダラカナルチ好ムヅ後ノ世ノ
風ニゾアリケルサレバタケ高カラヌチイトフ心ハ曾テナシソレハタ男ニテハヨキトカハ又近キ世ヨリ題歌チ
宗トス凡ヨムホドノ歌ノ題歌ナラヌハナシソレ故カクナリユカデハ叶ハヌナリト或人ハイヒシ
相聞ノ歌ナラバ女ムキナレバ男ニテモ女風ノ掠歌チ詠テモ難ハナカルベシ外ノ歌ニテハイカデヨシト云ベキ
世ノ惡習ナレバ力ナシ

カラ歌ニ宮怨閨怨ハ格別ヤハラカニ作ル外ノ詩トハ替レリ誰カ、ル法チ立タルニモアラズ自然ノト也此ハヨ
キ見合セナルベシ

これやこのゆくも歸るもわかれていゝるも志らぬも
あふさかの關 後選 逢坂の關に庵をつくりて住けるにゆきかふ人を見て 蟬丸
第三句わかれつゝトアリ

コレコソ逢坂ノ關ナレト云フヲ引分テ上下ニ置テソノ中ニ關ノ狀ヲ述テ逢坂ニツケテリ關ニテイハバ出テ
往トシ入テ還トス田舎人ノ往還ハ此ニ反スレトレハイハズ

出ル人ト入人トハコ、コテ東西ニ別ル、也共ニ出入ハ識人モシラス人モ各コ、ニ相會テ往還スル也

これやこの萬葉ニハ只此是ノ二字ヲ書タリこれはこれトヨミテヨカルベシト思フ蟬丸ノ時代ハイカッアリシ
ヤ

わたの原八十島かけてこき出ぬと人にいつけよ

あまの釣舟 古今 おきの國へなかせれる時に舟にのりて出たつとて京なる人のもとへつかは
しける 莖

天津風雲の通路ふさどちよをとめすかた

志はしとよめむ 古今 五節の舞姫と見てよめる 良岑宗貞

コノ卷ノ題名ハ後人ノ添タルモノナレバトカク云ニ及バズ古今ヲ善トスルノミ

舞姫ヲ天女ニ見立タル歌也コレニテ諸事スムト也禁庭ニテハサモアルベキコト也

とどめチ萬葉ニイカニ書タリ此ハ只古詩ノ季女ニヨク叶ダレバ外ニ論ハイラヌト也

季女ハ少女ノ稱也ヒロク用ユ乙女ヲ於ノ假名也ト云ハ當ラズ甲乙ハ大小ヨリ別ル、文ナリ乙女ハ即少女ナリ
トノ假字當ルベシ

つくはねの峰より落るみな川の川こひそつもりて

淵となりぬる 後選 劍殿のみこにつかはしける 陽成院

つくはねハ山ノ名也峰ハ山ノ高尖ノ處チイフ重言ニ非峯嶺ナト義ハ各替リアレト和語コテハソノ分レナク混

ノみねトヨム故毎々マギレヤスシコノ歌ハ嶺ノ心ニテ詠タルトモアルベシ嶺ハ高處ノ少シ卑クノ山道ヲ作り

テ踰ルナラバ踏ベキ處ヲ云也又思フニ歌ヨム人ハカ、ル文義ヲ精ク明ラメントハ思ハズ只山ノ高キ處ヲみね

ト覺エテヨム也高處ニテノ尖リタルヤ下リタリヤ始ヨリ知ラヌナリコノ歌モ然ルベシ

コレハイトワロキ歌ナリ狂亂天子ナレバサモアルベキトナレドコノ卷ニ入タルハイカニツヤト思ハル、ナリ

サレド歌ノ疵ハ疵ニテ只歌姿ノヨキ故人口ニ膾炙シタルカ後選ニモ入コノ卷ニモ入ツガヤみねより落るト山

頭ヨリ流落ルヤウナルハ地理ニ叶ハズ是ハ地理不案内ノ歌人ノ謬也論ナシ

戀積成淵ハ一向イハレヌト也コレモ論ナシ

陸奥の志のふもちすり誰故にみたれそめにし

われならなくに 古今 題志らす 第四句みたれんと恐ふ 融

亂ハ思ミダレテ筋ナキヲサスル也みたれむと思ふハ本歌也コ、ニハ伊勢物語ヨリ廻リテ入タルナレバ答ムベクモアラズ

そめにしハ年若ク事ナレヌ人ノ口ツキ也伊勢物語ニテハホドヨキナリ

みたれんと思ふ 句中ニ文字移リアレバ字餘リコハ非うちいで、みれのあらしと思へはノ類也イカナルコモ誰ガ上ニテモ亂ルベシトハ會テ思ヒヨラス我ナルニコノ度ハ初テ亂レタリトノ意也

我ならなくにハ我ニハアラザルニノ轉音也即古語也外ニ約ノ延ノトムツカシキ穿鑿ハイラスコ也此ニ似タルあらなくにト云詞ハ即あらずナリ蓋なくハ無也すハ不也是ラ何ツ延約ノ論アラソヤ又此ヲ我にはあらくにノ約也トイハハ害ナカルベシ

忍ムモち摺トハ只世ノ常ナル摺染也古ハ草ノ花ニテモ葉ニテモ布ノ上ニ摺付ケテ色ヲナス種々取マゼテ青クモ赤クモ定リナル形モナク手ニ任セテ摺付レバシドロモドロナル文彩ナレバモテ摺ト云ナリ萬葉ニ斑衣ト書タリ枕草紙ニ山藍にてすりもどろかしたる水干はかまトイヘルモ皆摺ナリ近古トナリテハ衣裳ノ飾リウツクシクナリテ摺衣モ花鳥草木ノ形ヲ備ヘテ摺タリ此ハ板ニ其形ヲ刻ミテ其上ニ布ヲ敷テ又其上ヲ色アル花葉モテ摺ナリ或ハ厚紙ニ模様ヲ彫貫テ布ニ押當テ其上ニ紅藍諸色ヲ流シ染ルモアルベシ此ハ今花布染ト云是モ摺染ノ内也此等織染寮ナドニハソノ設アルベシ行幸御幸或大臣ノ供奉ノ衣裳ニ松ニ鶴萩ニ蟲ヲ摺ヤウノヲ記録ニ多クアリ此ハモテラズ忍バズノ摺染也此ニ對シテ忍摺ノ名アリ蓋常人ノ家ニハカ、ル設ナケレバサル方ニ申請ヲモ難クレバ家ノ内ニテ染ルハ古ノ如クモテ摺ナリ人ニアラハサズ家ノ内ニテミソカニ染ル故忍摺

ト云今ノ人ハ是ヲ手染ト云ナリムツカシキコアラズ

忍摺チイハントテ郡名ヲ冠ラシ郡チイハントテ國名ヲ先出シタルノミ國ニ意ナシ郡モ聲ヲ借タルノミ也俗説奥州ノ石ノ調布ノ忍草ノ皆虚談ナリ

忍草ノコノ歌ニハイラスコナレモ序ニイフベシ此ハ垣衣ノ和名也ト云フ然ニ垣衣又一説ナラズ古ハ庭ニモ石ニモ屋上ニモ生ル青苔也歌ニこけろモトヨミタルハ是ナリ梁ノ陶弘景ヨリ以後ハ一ツ葉ヲ垣衣ト名付タリ和名抄ノ鳥菲是ナリ馬蘭ノ形ニテ小サキモノ也コノ葉ニ歌カキツケタルコトモ物ニミエタリコノ垣衣コソ忍草ニ叶ヘリイツノコロヨリカ今ノ世俗ニテハ井戸草ヲ忍草ト名付タリ是ハ大ニ違ヘリ歌カクベキ葉アリヤ

薇蕨ノ小サキヤウナルモノ也イト細ナル葉ナルチ
淵ノ解ハ皆謬レリ特ニ俗説ノ井戸草ヲ用タル更ニ淺マシキ

君かため春の野に出て若なつむわかころも手に
雪はふりつゝ 古今 仁和の帝みこにおいしましける時に入に若菜給ひける御歌
立わかれいなばの山の峰に生る松としきは
今かへりこむ 古今 廻らす 行平

ちはやふる神代もさかす龍田川からくれなるに
水くゝるとは 古今 二條後の東宮の御息所と申ける時御屏風に龍田川にもみち流れたるか
たをかけりけるを題にてよめる 業平

からくれなるハ重言ニ似タレドコノ時代ニハカク用タルコナルベシ又草木ノ名ニハカ、ルコ世ニ多シタトヘ
ハ黍ニ似テ大ナル物ニ唐黍ノ名アリ又唐黍ニ似テ少異ナル物ニ韓唐黍ノ名アリ伏見ニテ作リタル大ナル蕃椒
ヲ伏見唐からしト呼也伏見からしトハイハズくれなるト名付タル物ニ又からテ加ヘタル名ナルベシ
くゝるハ綾ノ説大ニ好又木葉みならずくれなるにくゝるとて霜のわやにもおさまるかな時雨に龍田の河
も染にけりからくれなるに木葉綾ればこの二首を引て或家ノ古キ説ニヨルトイヘリ然レハ古クヨリ言來コト
ナルベシ淵ノ新説ニハ非

墨江の岸による波よるさへや夢のかよひ路
人めよくらん 古今 寛平の御時后宮の歌合のうた 敏行

晝間ニ人目ヲ避ルハ定リタルコトツレテ除置テ何故夜ノ夢サヘ人目ヲ避ラントソノ苦ヲ歎ナリ
さへハモト通路ノ下ニアルベキチ上ヘ引上ケタルノミ意ハ同夢ナラバ避ズルヨカルベキモノヲト云意アリ凡
らんニテ留タル歌ニハ上ニアルベキ何故チ省キタル例多シ淵ノ解ハ當ラズ古歌ノ心ヲヨク意得ヌモノハ文字
コノミ泥ミテ解アヤマルコ多シ

淵云られたに人めを避るにやどわひたる也歌ノさへチだにコカヘテ説タルハ大ナル謬也さへトだにチ同義ト
思ヒシニヤ萬葉ニ精キ人ノイカデカクハ謬リケン頼阿法師ノ歌ニモさへトだにチ取違ヘテヨミタル一首アリ
たにハ物一ツチ引上ケタル詞ナリさへハモトアル物ノ上ニ添加ル詞也サホド紛レヤスキ詞ニモアラヌチ俗言
ニ此チ混同スル故ツレニ亂サル、ナラソ

夢中ニテ人目ヲ避ルハ夢中ノ實也ツレチ疑フベキニ非コ、ニ心ツカザル故ニヤ右ノ解ノ上ニ行逢かたさの
一句チ添タリカ、ル増添ハ私心ニ非ヤ 小町ノ夢路をさへに人はどかめしチ引タルハヨシ此ニテモ心ツカザ
リシニヤ又引タル夢にたに人めとモるノ歌ハアヤシキコ也誤字アルニヤ

難波かたみしかき蘆のふしのまもあひてこの世を
すこしてよとや 新古今 題あらす 伊勢

あいでこの世を一意ニツク歌也ハツカノ逢トモナクテ一世ヲ盡セトノ心ニヤト恨タルナリ
淵ノ解ニ志ハしはかり逢こともなきのわか世をひたすらに戀つ、ナド二段ニ別チタルハ大ナル謬ナリヨキ歌
ニハカ、ル支離ハナキモノ也且ツノ説ニテハ上句辭ヲラズ

俗語ニツレ取テシレヨト云チ古語ニハそれとりてよト云てよハ令スル詞也約ノセテ問ニ及バズ且約ノセ違タ
ルコナシハ外にすこせト云タル時ツレテ解ノせハ志テノ約也ト云テヨカルベシコ、コハ用ナシ本末チ失フ

わひぬれは今はたおなし難波なるみをつくしても
あはんとそ思ふ 後選 事出でて後に京極の御息所に遣はしける 元良親王

わびハ困極ノ義也別ニ一ツノ辭ナリ他辭ノ約延チ論ズルニ及バズ且うらふれハ憂ノ轉語也わび當ラズうらふ
れニハぶらくノ意アリわびニハ引縮ラレタル氣アリ混ズ巨スベテ困極人チわび人ト云故ニ貧窮人チモわび
人ト云憂アル人ト云ニハ氣象同カラズ

はたハ將也後チカケタル詞也果ハ前チ驗スル詞ナレバ此ヒ當ラズ凡漢文チ知ラヌ人ハ文字ニ無理ナル解チ着
ルツ心ウキ

今困極ノ身トナリテ惡名ハ己ニ身ニ受タリ今ヨリ畏懼トモコノ惡名ノ消ル期ハナシ再逢タリ更ニ惡名ノ益
スニモアラチバ惡名ハ同シ惡名也トテおなし名トツケタリ今我ハ生タルカヒモナケレバトヒ此ニテ死罪
チ得ルニ惜ムニタラズ故ニ再逢ント也極メテ惡辰ノ詞也

淵ハおなし名ノ巧チ嫌ヒテコ、ル巧ナキ萬葉チ引テコ、モ言ヒカケコハ非ト云ツレニテハコノ歌ノ味ハナシ
好古ノ癖ニテ已カ詠歌ニ巧麗チ去ハ心任セノ也前人ノ巧麗ナル歌チ已カ好所ニ引入テ其巧麗チ除テ解チ着
ルハイカナル義ツヤ

思ひわひトヨメル歌ハ思念ノ困憊ナリコ、ノわひぬれはハ一身ノ困極也同語ニテモ事ニヨリテハカク分ル、
モノ也混同スルハアシ、

はたやこよひもわかひどりねん將トテ今夕チ思テ云ナリタトヒ夜ニ入テヨミタリ尼後刻寝ニ就時分チサシテ
イハハ同義ナリ歌ノ末ニ置タルはたモ助字ノヤウニ見ユレ尼將ノ義離レズ是チ別也ト思フハアシ、
われはたいかに いかにせんはた 皆將ノ義ナリ二語違タルコト少モナシ

我マサニイカコセンヤ マサニイカコセンヤ皆はたト云モ同シ助辭トナスベキヤハ

今來んといひしはかりに長月の有明の月を
待いてつるかな 古今 題しらす 素性

今來ハ即時ノ詞也只今ツレハ參ラント云シ也 淵ノ解ノ今の間ハ當レルコトナレニ語猶緩シ主ニアリシ今歸リ
こんハ待ト聞タル即時ノ今ナリ此ト同

ばかりハはせ也いしばかりを命にてノ歌モコレホドノ僅ナル一言チタノミタル意ナリ此等のみニ混シタル
ヤウナレニ上下ノ詞コテサル意ニモナル也但はかりノ詞チ直ニのみト解スルハアシ、けふはかりノ歌
モ程コテヨシ俗言ニ位ト云ハ即はせ也即ばかり也

此等ニイヘルのみハ漢文ニテハ而已ナリ耳ニハ非カク文旨ニテハ和語ニモ過多カルベシ尺寸ニテ是レ程コノ
位ト俗ニ云ハ即こればかり也譬ヘハ三寸ばかりト云二寸八九分ヨリ三寸一二分チ包テ云ナリ三寸而已ト云ハ
三寸チ限トスル詞ナリ三寸ニ少不足ハ許ス有餘ハ許サヌ也俗言ニ急キノ旅行ナレニ一日位ハ滞リテモ苦カラ
ズト云ハ位ノ字ニテ二日チ包ミタリ即程ナリばかりナリカノけふはかりノ歌モカクトキテコソヨケレ然ルチ

耳程とふたつの意ありトイヘルハ古言ニ精キトハ思ハレズコノ尺寸二言ノ兩義ヲ混ノ一義也ト思フニ
月ハ十六日以後ハ皆有明ナレド歌ニ入ハ大抵廿日前後ノ月ナレバ夜ノ深淺ヲ知ベシ望後晦前ハ暫時ノ影ニテ
言ニテラズ晦前又月至テ細シ故ニ並ニ歌ニイラズ

コノ歌ハ夜ノフケタル處ニ感アレバ夜半以後ニ出タル月ナルベシ廿日比有明スベキ月ノ出ラコノ歌ニヨメリ
曉ニ殘リタル眞ノ有明ナル月ト別ナリ
つるハ漢文ノ矣ニ當ルベシぬるけるト意ハ同シカルベシ詞ノツレキニテソノ別アルノミ

吹からに秋の草木の志をるればむへ山風を
あらしといふらん 古今 是真親王の家の歌合のうた 康秀

志とるハ萎折也志ほるハ絞縮也コレハ一刀兩斷ノ詞也淵ノ萎折ニ志ほるト書ハ非也ト云ハ當レリサテ又古事
記入之乎利乃酒ヲ引テ清濁相通コテ苦カラズト云ハ非也世ニ是ヲ片手打ト云通ナラバイツレモ通ナルベシ不
通ナラバ兩ナガラ不通ナルベシ縮ニ志をるガ苦カラズハ折ニ志をるトカキテモヨカルベキ也彼ハ相通トテ
ユルシ此ハ相通ニテモ許サヌハイカニツヤ凡古書ナレバ言ヲ盡シ回護シ今昔ハ口ヲ極メテ詆毀スルハコノ翁
ノ癖ナリ

むへ古書ニ字倍鳥米ト書タルハ梅馬ノ類也九州ノ人ハ今ニテモうめら呼ナリ古聲ノ殘リタルコト古今ノ
言ノ變ナルノミ此ニ是非ナシトノ義ヲ解スルニハ宜ノ字當レリ諸ハ文義ヲ失フ諾ハ應聲ナリ世ニ心得候ト云
ナリツレヲむへニ充タルハ古人ノ謬ナレバ捨タルゾヨキ

諸ノ字書ニ嵐山氣也トノミアリテ風ノ解ナシ只和名抄ニ山下出風也トミエタリ此ハ杜撰ニハ非ルベシコノ書
ニ引タル古書今ノ世ニ傳ハラヌ書多ケレバ誰ノ説トハジラザレモ字形ノ會意ハ疑フベシモナシ淵モ風ト云ツ
、更ニ山氣ヲ傳會シタルハ拙

康秀頭の雪ノ歌ノ時ヲ元慶元年ノ前四歳ト試ミコ定ムレバ此ハ貞觀十五年也コノ歳ヨリ寛平五年ノ歌合マテ
二十年ナリ歌合ノ時七十歳ナラバ前ノ歌ハ五十歳ノ時ナルベシ五十ニテ白髮ヲ歎クハ常ノト也白髮ナガラ官
途ノ沈淪ヲ愴タル歌ナレハ六十以上ノ作トハミエズ然レバ寛平五年ニ康秀七十計リコテ歌ヨミタルハ不審ナ
ルコトハナシ康秀ハ此時まであるべうモ覺えずト淵ノイヘルハイカニツヤ年算ノ違タルト也是真親王ノ歌合モ
寛平中ノト也同年ナリシヤ二三年ノ前後モアリシヤ是モ争フコトヲズ彼諸證ヲ引テ必朝康ガ歌也古今ノ康秀
ハ謬也ト定メタリイツレニテモヨキナレバツレテ争フコトハアラズ唯違タル年算ニテ人ヲ嚇スチウトマシク
覺エテカク云ナリ

俊成卿ハ八十以後ノ歌多クアリ

月みればちゝに物こそ悲しけれ我身ひとつの
秋にはあらねど 古今 これさたのみこの家の歌合のうた 千里

淵ノ解ニ白詩ノ秋來只爲一人長ヲ引テ秋來只一人爲長ト書タリイカニ漢事ニ關キトテモアマリナル文旨カナ
此ニテハ漢事ヲ憎ミタルモ無理ナラスサラバ傳寫ノ誤カト思ヘド今其本ヲ寫シ刻ミタル人モ其一流ニテイト

口剛キ人ナルヲ

又此ヲノヲテ争フテカラノ古事皇朝ノ古事ナト云シモ其文旨ナリ
唐土ヲモろこしト云韓ヲからト云からハ韓ノ字ノ音ナルベシカク二國ニ分レタル名ヲ混同ノスベテからト稱
スルハ世俗ノ言也漢韓琉球紅毛歐呂遮マテ混ノ唐人ト云ハ全ク女兒ノ誤ナリト云正同類ナリ淵ノヨク知
ルコナルコ解中ニ常ニ混ソからト云不審ナルコ也又ソノ一流ノ人ニ我國ノ外ハイヅレノ國ニテモからト申ベ
シト云人アリト聞也ソノ見識コヤ

詩ヲからうたト云フハモト韓ニ付タルコニテイマダ唐土ノ通路ナキ時ニ既ニコノ名稱アリテソノマ、ニ後世
ニ傳ハリ即詩ノ字ノ和訓トナレリ故ニ古今序ニからの歌ナド書タルノミハ謬トハイハレズ仲麻呂ノ歌ノ端書
コモソからにて月を見てよめるト書タラハ人皆笑フベシカ、ルコハ混同ノモ苦シカラヌコモアリ混同ノア
キコモアリ事ニヨルベシ一概ニ法ヲ立巨

このたひはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦
神のまにく古今 朱雀院ならにおはしましける時手向山にてよみ侍る 菅原朝臣

あへずハ不合ノ義也即不能ヲ云ナリ不堪ニハ非

コノ手向山ハ相坂ナリ古今序ニモ相坂ノ手向ミエタリ南都ノ手向ニハ非

名にしおは、逢坂山のさねかつら人に知られて

くるよしもかな

後遷 をんなのものとへ違しける 三條右大臣

コノ女トハ御内ニ仕タル女ニテモアルベシ内ナル女ナラバカク忍タル詞ハアルマシト思フ人モアルベケレド
サニハアラズ人ニヨリテ憚リシサ、アルベシ天皇ニテスラ忍テ歌ヲ賜ヒシコアリ密ニ采女ヲ召レシコモア
リ同ク仕ノ内ニモイト末ナル賤キナド或ハ年ノ似ツカヌナド傍ノ人ノユルサヌナドサマ、アルベシ河東獅
子ヲ恐ルハ勿論

相坂ノ葛ノクルコテ歌ノ意ハ足レリさねハ寝ヲ掠テ云タルノミ歌ノ主意ニカ、ルコナシコレハ男歌ニハ純ト
モ云ベケレ正相聞ノ女向ノ歌ナレハ疵ナシ又さもいさノ意ニテいさねント云意ヲ掠メテイヘル也コノ女ノ名
ハシレヌコナレ正玉葛ナド呼ケラシサナラデハ首句力ナシ

くるハ女ノ我方ニ來ル也人ニシラレズ忍テ我寢所ニ來テ願フ也我往テ寢テ來テ云ニハ非舊解ハイト煩シくら
まはしけれくるをいどふノ二首ハ女ノ方ニ男ノ來也コノ歌トハ同カラズ末ニ引タル闕文

小倉山みねの紅葉はこゝろあらは今ひとたひの
みゆきまたなむ拾遺 亭子院大井に御幸ありて行幸もあるへき所なりとおふせたまふに
このよし奏せんと申て 眞信公

法皇賞玩ノ餘リニカクノ玉ヒシテ承テ右ノ由ヲ奏聞セント云ツ、コノ歌ヲ詠タルノミ皆當坐ノ談ナリ
カク詠タレバトテ後日必行幸アルベキニモ非行幸ハ事嚴重也急ニハナラヌコモ有ヘシ晴雨ノ變紅葉ノ衰落ソ

ノ外ニモ障アルベシ法皇ハサモ非レバカ、ル御幸ハ毎年モアルベシ記録ニ載ルコトモ非供奉上卿ノ官階ヲ論スルハ非ナリ記録ニ漏ルコト尤其理也其數モ尤多カルベシ吾儕ノ釣舟ヲ浮ヘテ一日出遊ト多ク替タルコトモアルマシ此ク御位ヲスベリ玉フ御本意ノ一箇條ナルベシコト解ニ記録ヲ求索ソコトクシク有無ヲ正シ年月先後ヲ討論シタルハ何ノ益アヤ愚ト謂ベシ

コノ歌ハ疵ナキノミアマリヨキ歌ニハアラズ御幸ヲ深雪コイヒカケタル歌トハ巧拙イカニツヤ

みかの原わたてなかるゝ泉河いつみきとてか
こひしかるらむ 新古今 題志らす 兼輔

山里は冬そさひしとさまさりける人めも草も
かれぬと思へは 新古今 冬の歌とてよめる 宗千

心あてにおらはやおらむ初霜のおきまとはせる
志ら菊の花 新古今 志ら菊の花をよめる 躬恒

折置並におノ假字ヲ用ベシ

小高キヤウナル處花ナルベシヤ横ナル端ハ枝ノ末ノ花ニヤト推量リテ折タラハ折モ得ヘシト云テ實ハ其折ガ

ヲキチ云ナリ

おらのや只おらハト云ト同シヤノ字疑ニ非譬へバ往ント思フヲ往ハヤト云ニ同ヤチ疑トミテ下句ニメクラスハ泥

コノ句おくの^らおりてんと云テモ同義也

感まどふハ本義也まどひすハ活用也せるハすノ轉ニテ同義也譬へハ亂ミたれハ本義ナリみたすハ活用也みたるみたりハみたれノ轉也みたしハみたすノ轉也歌人ハ此ヲ混同ノ書誤ルコト多シソノ本ハ古書訓讀ヨリ起タル謬ナルベシ

まどひせるハ霜ノナシタルコト也人目ノまどふコトハ非

有明のつれなく見えしわかれよりあかつきはかり
うきものはなし 古今 題志らす 忠岑

有明ト云テ即月ヲ指也故ニ下ニ見えシト承タリコノ句實景也冠辭ニ非

コレハ陸シツカタラヒシ男ノキヌノ別ヲ悲ミ其後ニ詠テ遣ケル歌也つれなくハ月ヲサシテ云也月ヲ妬意アリ女ノつれなきニハ非

舊解ニテハ有明ハ曉ノコトニナリテ下ノ曉ト同意ニナリテ有明ト云タル餘ナシ吾解チモ淵ニ語リナハ淵必ソレナラバ何故コノ歌ニ有明ノ月トタシカニイハヌアト云ベシ抑カ、ルコトハ作者ノ手段ニアリ解者ノ追テ答ム

ベキニ非又舊解ニテハ見えしノ詞落ツカズ且又歌ノ姿古今アリ詞モ古今アリ古語ヲヨク知タリトテ様ヲ守テ後ノ歌ヲ解ス叵

カノ時男心ハ残りナガラナクノ出テ歸ルニ曉月ハ我ハ送ラントモセズ依然ト圍ニサシ入テ女ヲ照ソ居テウ
ヲヤマシクモチタマシクモ思ヒシ情ヲ述タリ別れよりト云ニテソノ後日數ヲ歷タルヲ知ヘシ後朝ノ歌ニ非
コノ後曉ゴトニコレナ思出テ曉ホド腹ノ立希代ナル物ハ世ニナキゾト也

つれなしハモト無侶ノ義也スベテ人ノ我ニ同心ナキチイフ我思フバカリ人ノ思ハヌナドヲモ云也ハテノハ
人ノ薄情ヲ怨ル辭トモナレリ皆本義ヨリ推ハ迷フコトナシ淵ノ無顔目ハ驚説ナリ且ソレニテハ無面目ト同ク愧
ル詞ニナルベシ古言ニ精ト云入ノ口ヨリイカデカ、ル新鑿ハ出ケルニヤ

コノ歌サラトヨミテ感モ深シイトヨキ歌也憎ムベキ纖巧ハナシ纖巧ハ後人ノ付添タル纖巧也サテコノ歌ヲ纖
巧也ト謂ルハイカニツヤ作者ハ長ク宛テ合ベシ

古今ノ部類ハ大抵詳ナレバサマデ泥テ歌ノ意ヲ傷ルハアシ

又部類ニ據テ更ニ考ルニコノ歌實ニ逢ズノ曉ニ出テ歸タル事ヲ述タリト見テモ通ズベシ歌ノ解ハ右ニ異ナル
コトナシ情ハ更ニ切也トモ云ベシ但別ノ字ニカナシイツレ然ルベキヤ

凡古書ヲ講明スルニハ剛復ヲ慎ミ戒ムベシ吾一旦カクト定置テ遺憾ナシト思ヒタル事モ年ヲ歷テハ又考ヘ直
シ悔改ムルコト多シ一人ノ身ニテスラ然リ況他人ニ向テ剛復ヲナスベキヤ只我意ヲ捨テ至當ノ正説ヲ求ルワザ
コソ願ハシケレ世ニ才高キ人ハ必卓見アリ卓見アレバ剛復隨テ出ルモノ也卓見アリテ剛復ナキモノハ天下ニ

幾人アリヤ

朝ほらけ有明の月とみるまてに吉野の里に
ふれる志ら雪 古今 大和國にまかれりける時雪のふりけるをみて 是則

坂上ノヘトヨムモノウヘト書タル同シ也文字移リノ類ナレバ論ニダラズ

夜アケナントノ未剪髻ナルヲ朝ほらけト云也萬葉ヨリ後ノ詞ナレバ只時俗ノ語ナルベシ

約ノ轉ノト出處ヲ求ルニハ及バズ世ニばかすト云語アリ繪ノ限ト云ヤウナル引ステタル筆ナドヲ云是モ剪髻

ノ意アリほらけニヨク似タリ凡形容ノ文字ハ音ヲ主トスルモノ也強テ義ヲ求叵

有明ノ月ニ譬ヘタル雪ナラバ山頂ニノミアル雪ナラン然レバ薄雪ノ説ニ從フベシ雪ノ厚薄ハ年ニヨリテ同カ
ラズ必シモ冬ノ淺深ニヨラズ然レバ古今ノ部類ニモ障ルコトナシ

年若かりける時冬のころ大和にいきたるとあり龍田山に夜とわかしてつとめて立出けるもくく霧のまされ
にむかふの山にふと有明の月影と見出したるありや雪にやと人皆いひさはさけるまことにこの歌にたとへた
るさまいと妙なまや月影はた、山の頂にのみありし其時口すさみし人ありけり

有明の月影あるさ山の端は其みよしの、雪とみるまで

この外に註解はいらぬことにや

山かはに風のかけたる志からみはなかれもあへぬ
もみちなりける 古今 志かの山越にてよめる 列樹

久かたのひかりのとけき春の日に志つこゝろなく
花のちるらん 古今 さくらの花のちると見てよめる 友則

志つ心ハ静心ニテマツハキユニレトモ實ハ鎮定ノ心ナリ

志つ心なくトハ俗言インガシウニ也

カ、ルらんハ上ニ何故ノ二字アルベキチ省キタル詞ナリ前ニモ云タレドコ、ハ猶更明白ニテ實ニ證ニ引テヨ

キ歌ナレハ重チテ又云

志つ枝ハ志つ枝ナリ此ニ叶ハズイカナル心ニテ傳會シケルコヤ志つ鞍モ別ノコナリ此ニ云ハ煩シ

誰をかも志る人にせむ高砂の松もむかしの
友ならなくに 古今 題志らす 興風

昔多ク高砂ト詠タルハ即山也イヅコノ山チモ云尾上鐘トハ其山ノ半腹ノ寺ノ鐘チ云是ハ定リタルコト又播

磨ニ高砂ト云地名アリ此ニ古キ松アリシト云モ違ナキ也海瀨ノ小山丘陵ニテヤアリケン此ノ古松ハ難波戰

ノ比西國ノ武士途中ニテ斬倒シタリトナン尾上鐘ハコノ高砂ニハ縁ナシ今播磨ニ別ニ高砂ト云大邑アリ平地
ニテ海瀨ニモサマデ近カラズ昔松アリシ高砂トハ同所ナラヌコハカノ武士船中ヨリ松ヲ望見テ何ヤラン思寄
テ船ヨリ上リテ斬タリトイヘハ必海瀨ニアリシト思フ也今ノ高砂邑ノ旁ニ尾上ト云社アリソコニ古鐘アリ是
チ尾上鐘トナツク寺ト社ト違タルモチカシ是チ巡禮名所ト云中古赤松ノ榮ヘシ時國中ニ多ク名所ヲ定メタリ
清水ニモ十水トテ名ヲ定タリ社ハコノ時ニ始リシニヤ社ニ古キ偃松アレモ何ノ故事來歴モナシカ、ル名所ハ
諸國ニ多クアリ陸奥ニ別テ多シ

松ニ相生ノ名アリ一方ハ雄松一方ハ雌松ニテ偕老ノ義ナルベシ墨江ハ昔ヨリ姫松ト稱ス即雌松ナリ今赤松ト
云樹ノ大小ニヨラズ然ラハ高砂ノ古松ハ雄松ナリケラシ色黒キ世ノ常ノ松ナリ

コノ歌我年老テ友人ハ皆死盡タレハ今ハ誰ヲカト尋ルニ播磨高砂ノ松ヨリ外ニ世ニ古キ物ハナキナリソレサ
ヘ非情ノ物ナレバ友トハ頼マレズト也松ノ有チ云テ友ノ無チ歎クナリ
解ニ吾よハひそれにひとしハ謬レリ

松ハ數百千年チヘテ名高キ古物ナルチイカニ我年老タリモソレニヒトシトハ思フマシキコト也
今はひたすらにモ謬レリコ、ニテ別ニ解チ生ズルハ歌ノ意チヤブル

人はいさ心も志らすふる郷は花をむかしの
香にはほひける 貫之

古今 初瀬にまうつるとに宿りける人の家に 此ハ逆旅ノ賤館也ミエズ又貧人ノ家也ミエズ今大寺ニハ坊官ト云モノアリ非僧トシテ世トス伊勢ノ御師ニ似タリ大抵此ナルヘシ各貴人ノ主顧アリテ此ヲ宿坊ト云寺中小院ニモ宿坊ノ名アレハ別ナリ久しくやどらて程へていたれりければ 此ニ何ニテ心ニ叶ハズ事ヲ替テ度々往タリケル後ニ又思ヒ返テ元ノ宿坊ニ往カノ家のあるシ 此ハ女主人ヲ持テ住ケルナルベカクさたかにやどりはあるといひ出して侍りければ 君ハ心替リテ久シク來玉ハザリシモ我ハ替ラテアルト云フ宿ニ托シテ云ナリコノ主ノ言ニ怒意アリサ 子ドコノ時世ノナレバ少ノ風流ハ有ケラシ源平ノ戦ノ前後諸國驛道ノ宿々ニ長ト云モノアリ女子主トス娼妓をここにたてりける梅の花を折てよめる

コノ歌疑ノ詞ハアレド實ハ女ノ罪ヲ定メタリ是ハやどりはさたがトイヘルヲ受ザル也傳ヘハ昔語ヲロシ言モアルヲ忽打捨テ外ニユスガチ定メタル類ニテモアラシクサレバ花コソ昔ニ替ラテ人ハ替タルラントナリ まらもハ實ニ不知ニハ非然ラズノ意ヲ云ナリ俗言ニモカハル處ニ合點ユカヌト云疑ニハ種ナケレハ實ハ聞ニ定メタル意アリテ云ナリ言語ノ道古今雅俗同シキコト多シ

いさゝらすハ成語也シレテ分テ上下ニ置タル也故ニいさゝノ二字ニテ解テ立ルハアジ、
いさゝ清ムベシいさゝ否也いさゝ誘ナフ詞ナリ是ハ分明ニ別義ナリ人ヲ誘フニ否ノ字ヲ充ベキヤウナシ此ハ硬説ナリ文旨ナリ

さトナト通ズトノミイヘハヨシ横通同韻ナレバ清濁ニ拘ルコトナシ然ルニさノ濁音ナニ通ズトイヘハ清音ハ通セズト思フナルベシ清濁ニテ通不通アルナラハ横通ノ説廢スベシ横通廢スレバ韻鏡滅ブ

いさゝなふハ誘ノ字當レリ萬葉ニ率ノ字ヲ用タルハ當ラズ人ヲ誘フ言ニいなやト云ハ必ソノ前ニ也かんやト云詞アリテ後ニいなやト云コトコソアレいなやノ三字ニテ誘フ詞ニナルベキヤハ漢文ニテハ子亦欲行乎否乎トイヘハ誘詞トナル子否乎トイハ何ノ事カシレズ誘詞ニハナラズ且いなやハ上ノ言ヲ打返ス詞也上ニ打返ス

ベキ言ナクテハ言出ラレヌコトナリシレニ否ト率トナ同義也ナドハ古言ヲ忘レタル人ノ云フツ
漢文ニ否不然也ト云語アリ俗言ノいやそでないニヨク當ルいさゝらすニ語勢ヨク似タリマタ否ノ一字ニテモ用ユ不然ノ二字ニテモ同義也語ノ輕重ノミ意ハ替ルコトナシ特ニ歌ハ文字ノ數定リタルモノナレバ拙手ハ此ニ困ム名家ハ此ニ就テ巧チ施ス也語ノ輕重ナドハ作者ノ手段ニアリ後人ヨリ理窟ニテ推ベキコトニ非韓歌モシカリ

土左日記に君こひて世をふる宿の梅花昔の香にそ猶にはひける又山崎のこひつの繪もまかりのおほちのかたもかいらさりけりうり人の心をそまらぬ歌モ詞モ唯人はいさゝノ一首ヲ躡タルモノトミニタリ又ソノ歌ノ劣レルハイカバカリツヤ故コノ日記ハ説アルベキコトナリ

夏の夜はまたよひなから明ぬるを雲のいつこに
月やとるらん 古今 月のおもしろかりける夜わかつかたによめる 深養父

コレハ望前後ノ月ナルベシタトヒ望ヲ踰ルル也イマダ有明トハイハレヌコロナルベシ
夜ノフケユク姿モナク只宵ノ間ノ氣色ニテ直ニ明ルチなからト云也人ノ心ニモイマダ宵也ト思ヒヌベケレドソレハ詞ニ出サズ長夜ノ比ハフケユクニ隨テ氣象嚴肅ニナリテ今ハハヤ幾更ニモヤト人ノ心ニ當ルモノ也此ハソレニ對シ云ナリ淵モコノ意ナルベケレドソノ解明ナラズ
宵ハ淺夜ヲ本義トス事ニヨリテハ全夜ヲ通宵ト云フモアレハ本義ニハ非コノ歌ハ宵ノ字ヨク當レリ今の京

なたいよひは初夜とのいふト淵ハイヘド此ハ證ナキ言ナリ又コノ歌ヲ寫シタル人宵ヲ初夜ト書改メタルハ
コトニ僻事ナリ

初夜トハ即初更也初更ハ二更三四五更ニ對スル言也初夜ハ後夜ニ對スル言也イツレモ刻限定リタルモノ也刻
限ノ定リタル初夜ハ歌ニハ見アタラズ淵ハ何チ指テ今ノ京ヲ誣タルヤ知ガタキコ也

萬葉ニよひテ初夜ト書タルハ元來當ラヌコ也萬葉ハ何ニテモカ、ル類ナレバ其意ヲ取テ文字ヲ論セヌハ讀人
ノ通例也文字ノ亂レタルハソノ常ナレバ也ソノ亂レタル文字ヲ珍重ノ證ニ引ハ淵ノ癖也杓子定木ト云ベシ萬
葉ヲ讀ム法ヲシラザルニヤ忘レタルニヤ

暮過ルヨリ初更ノ後ヲ兼テ皆宵也又深夜曉方ニ對スレバ三更ノ比マデヲモ宵ト云ベシ深夜ニ寢入タル人
マタ寢入ラス前ハ何更ニモアレ皆宵ト云テ可ナリ泛稱ハカク動キ働クモノ也イカデ初夜ニテ限ルベキヤ
晦ノ夜宵ニ寢テ夜半比起テ物シヒナドノ旅立人ハ晦ノコチ昨日ト云朔ノコチ今日ト云宵ヨリ酒ノミ夜ヲフカ
ス人ハヤガテ鶏ノ鳴ベキ比マデモ朔ヲ明日ト云晦ヲ今日ト云時ニ臨テ言ハカクカハルモノ也

白露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ
玉そちりける 後選 延喜の御時歌めしければ 朝原

露ヲ玉ニタトヘタル歌多シ皆水晶ノ念珠ナルチ明カニ言タル註解ハ古ヨリナキハ何故ゾヤ玉ハ圓ナラヌモア
リ赤キモ青キモ又緒ヲヌカヌモアレバ外ノ玉ハ喩ニカナシ又念珠ハ白ノミナラズ其數多シ露ノ喩切ナリ外ノ

玉ハ然ラズ故ニ露ニ喩ルハ水晶ニ限ルベシ

わすらるゝ身をは思はずちかひてし人の命の
おしくもあるかな 拾遺 題をらす 右近

コレハ心モ詞モ勝レテヨキ歌ナルチから人の思ひめくらしナド難ツクルハイカニグヤ萬葉ニカ、ルヨキ心ナ
ル歌ナキ故ニ妬心ヲ起ノカバカリヨキ心モチタル女ハ世ニナキモノ也ト思フニヤ

身ヲ思ハズトトノ下ニハノ字アルベシ寂寥ノ苦ノミ命ニカ、ルコトニ非カノ誓ニ背タル人ハ神罰ヲ蒙テ命危シ凡誓ハ背キタル人ニ罰ハ
下ルベシ背カレシ人ニ罰ナキ理ナリコノ作者ハ背カレシ人ナレバ命ノ長レハナキナリ人多クハ我命ノコトハ打
捨テト解故ニアマリ深スギテ歌ノ意ヲ失フ淵ノ妬心モ此ヨリ起リタルナラン

又言のミまどめくと世ヲ誹誚セリ然ラバ心ヨリ起リタル惡念ヲ恣ニ惡行ヲスルチ善トスルニヤ 古學神學
ヲ務ル人ノ心バカリ知ガタキモノハナシ

ちかひてありしト云語ヲ省キテちかひたりしトモちかひてしト也皆時俗ノ語ナリソレヲ約ノ轉ノト後世
ヨリ考察スルハイラザルコ也又たりノ約ナド云ハたりチ本語ト思ヘルニヤイト淺マシキコ也

淵ハモト反切ヲ器シク云タル人ナリ老年ニ及テ少悔タルニヤヤメタリ又頻リニ約轉ヲ云ナリ約ハ反切トカハ
リタルコトハスシナシ今マデ活テハサバ又イカニ變ズベキ

心詞ヨキ歌ナラバ善ト云テヌムベキコト也ソレヲ強テ其平生ヲ考ヘテソノ虛實ヲ正サントスルハイラザルコ也

よくせわれわしくせられ思ふ心のまゝにのへ出すをト云ハ神道者ノ僻言ニ類セリ悪キ心ヲソノマノ、コノベタルハ何ノ賞スベキコアラソノベズ凡ヨカルベシ人心ハ廉耻ト云モノアリテ己ニ惡アラバ人ノ知リテ媿思フベシソレヲ耻トモ思ハテ言出タルハタトモ歌ノ詞ハヨク凡世ノ教ニ害アルベキコトハ細ケテヨキコト也上ノわひぬればノ類是ナリカ、ル歌ハナク凡人生ニ欠タルコトハナキナ

浅茅生の小野の篠原志のふれと餘りてなどか

人のこひしき 後選 人につかはしける 等

忍ふれと色に出にけり我戀は物やおもふと

人のとふまて 後選 天曆御時歌合 兼盛

こひすてふ我名はまたきたちにけり人志れすこそ

おもひそめしか 後選 天曆御時歌合 忠見

契りきなかたみに袖を志ほりつゝ末の松やま

波こそしとは 後選 心かひりけるをんなに人にかはりて 元輔

なハ抑ヘテ詰ル詞也カク契リタルコトハナキカヨト云ホドノ意也前ニモ見ユ

かたみにハ互ニ也雌ノ袖ヲ雄カ拭テヤリ雄ノ袖ヲ雌カ拭テヤルチかたみにト云ナリモソ兩人各自拭ナラバかたみトハイハレヌ互ニ非又拭ニ袖濡ル也濡多キ故絞ル也

袖ヲ縮ハ拭フチ仰山ニ云詞也涙ノ多キニ悲ノ切チ形状スルノミコノ句二人モタレアヒテ泣處ヲヨク形容セリ銘々ニ涙ヲ拭トナラバ常ノコト也言コトヲズ

コノ歌昔ヨリ志はるト書タリ絞縮也委折ニ非コノ説ハ前ニ見ユタリ淵ノ本ニ改テ志をリト書タルハヨカラズ萬葉古事紀等ノ厓雜ノ假字ニ拘ルコトナシ凡袖ノ涙ニ言カケタル歌ハ皆縮也ト知ベシ

淵モコノ歌ノ志はりチアヤトハ思ハチ凡例ノ萬葉古事紀ニ據テ硬説チナスハ是非トモコノ二書ニ背クマシトスル也古書ノ信心モヨキ程ノアルベキコトコソ又コノ歌志をリニテハ十分ナラズト思ヒシコヤ更ニ里ハ良

志ノ約也ト云説ヲ撰出マタリソモノ之乎良志トハ萬葉ニモ古事紀ニモ會テ無詞ナルニ推量チ以テ新ニ是詞ヲ設テサテソノ約ヲ取テ解トナセリカク我儘ニ古語ノ如キモノヲ作り出ソヨキコトナラバ古昔モ引コハ及バザルコナルベシ剛復ノ一念ヨリ起テ力推ニ押ヘ付ケテ強テ人ヲ服セントスルナリ此チ強説トイハズノ何トイハ

ン

本歌ノ誓ハ我モ他心アラバ松山ニ波モ踰ベシト也波ノ無チ引テ我ノ無チ證スル也淵ハわかまたはノ句ニ泥タルコヤ波のこもる時あらはわか他心も出来へしトイへり是コトハ本末顛倒ノ語意ヲ失フ且波もこえなんの

モ文字通せず

新羅ノ誓ハ松山トハ語ノ趣齊カラズモ新羅王ガ松山ノ意ニテ誓チ立ルナラハ

春秋のみつきを關かば鴨河の石もははりて星となりなむト云ヘシ此ニテ別ツベシ

あひみての後の心にくらふれむかしのものを
おもひさりけり 拾遺 題をらす 教志

コノあひ文字ニハ相ノ字ヲ書ベシ逢ハ當ラズ

相見ノ兩字ニテ逢ノ一字ニアタルベシ逢見ニテハ重複ノヤウニナリテアシ、

逢よとの絶てしなくいなかくに人を身をも
うらみさらまし 拾遺 天曆の御時の歌合に 朝志

逢トハサス所ノ女一人ニテ云ナリ初一度逢タリヨリ心乱レンノ後心ノマ、コナラヌニ因テ女ヲモ恨ミ又我
身ヲモ恨ルノ罪業ヲ作ルナリト悔ルヤウニ云ナシテ實ハ情ノ切ヲ述ル也櫻ノ歌ヲ引テ解ハアシ、彼ニハ世中
トイヘリ此ニハ無又辭ノ似タルトテ難ヲ付テ請モ無理也モトヨリ相聞ナレハ世中ノ意ハ會テ無ト知ベシな
くトハ少ヨカラヌコアリテカヘリテヨキコノアルトキニ云詞也俗語ノ結句ナリ絶テ逢ヌハモト願ハヌコナ
レト結句カ、ル益アルベシトナリ小利ヲ失フテ因テ大益ヲ得ル類ニハなかくテ用ベシ大利ヲ得テ因テ小損
ヲ得ル類ニハ用巨 淵ノ東西ノ解ハ圓ナラズ

又云一人に一首をどらんには是ハコノ卷ノ俗説ニ惑タル也論ナシ

あわれともいふへき人のおもはえて身のいたつらに
なりぬへきかな 拾遺 女のいける女の後につれなくなりて更にあはす侍りければ 謙徳

おもはえずしてノすしヲ略スレハ自ラ下ノテヲ濁リテヨムハ語ノ便ナリいかでハいかゞしてノ略ナリ也か
ハもかすしてノ略也あらでハあらすしてノ略也思ハ思ハずしてノ略也コ、モカ、ル例ナルチおほえず
のすを略てそのすの濁りをてにこむる言也ト輾轉杳冥ナルハ驚説トイハズンハ何トカ云ベキ且おほえずしてハ
おほえずしてノ略語ナルチ知ザルニヤ凡略語ハ其本語ニ因テ云ベシ一旦略セタル語ニ就テ又略スルコトハアル
巨

凡語ノ轉ハ自ラ人ノ口ヨリスベリ出ルモノナリ反切ニ拘ルコトアラズ此ヲ辨ヘントナラハ先今ノ世俗ノ語ヲ
辨フベシ

人ノ號ニ陶菴周菴月菴雪菴順菴碩菴アリ上字ノ韻ニ隨テ下字ノ音轉スルナリカクヨベト教ルコトハナケレハ
内ノ人ハ大抵カク呼ナリ諸國ニテ音ノ替ルコトハアレハ皆コノ圖チ出ズ又吉右衛門ト云名チ自稱ノキツチヨモ
ント云旁ヨリ殿様ヲ添テ呼キハキツチヨミト云權右衛門ハ自ラゴソチモノト稱ス旁ヨリハゴソチミトイフ又
ゴソチヨミトモ云此ヲ上下ニヨリテ轉ズル也

ノ末ノ句ハなりぬべらなりト云テヨキ所ナルチイカデカクハ詠ケンべらノ語作者ノ心コ好マザルニヤアラ

ンサレドべらハベギニ勝ルニシロノ比ニハべらトイフ詞ヲ世ニ用ルコトハヤミタルニヤアラフサラハカナシ

ゆらのとをわたる舟人かちをたえゆくへも若らぬ
戀の道かな 新古今 題志らす 好志

船ノ尻ノ舵ヲモ波カク櫓ヲモスニテカチトヨメリ此ハイツレナラフケズモヨキニヤ然ルニ櫓ハ一舟ニ數アルモノ也舵ハ只一ナリ今絶トイヘバ一ツノ舵ナルベシ

海門ハ岸通リテ波アラシツレニ舵ナクテハシノギガタシ此ハ何方ヘ行コト只浪ニタノヨヒテ安キ心ナキヲ述テ我マサコノ通り也ト云ナリコノ外ニ別ニ解ヲ添ルハアシ

八重葎志乃れる宿のさひしきに人こそ見えぬ
秋ハ來にけり 拾遺 河原院にて荒たる宿に秋來といふ心と人によりみ待るに 惠慶法師

風をいたみ岩うつ波のおのれのこくたけてものを
おもふころかな 詞花 冷泉院東宮と申ける時百首の歌奉りける時によめる 重之

御垣守衛士のたく火の夜いもえて晝いさえつ
物をこそおもへ 詞花 題志らす 能宣

君かためれしからさりと命さへ長くもかなと
おもひけるかな 後拾遺 をんなのまより歸りてつかはしける 義孝

少味ハ替レ正一首ノ内ニかなチニツ用タルハ歌ノ疵ナラズヤ或ハ長くもかモト詠タリシチ後拾遺集ニ寫誤リタルニテハナシヤ

かくとたに急やいふさのこもくもさしも若らしな
もゆるおもひを 後拾遺 女にはしめてつかはしける 實方

題ニ初て遣トアレバ未對面ナキ女ナリ

かくハ如此ノ此也俗言ノ夕様ナリ吾憂悶ヲ述ルモ初言ナレバ馴々シク此通リチタシカコモイハレヌ故サバカリノ思ナリトハ若ハシラデアアルベシトナリさしモハサバカリツレホド也

かくハ我言ノ上ニテ云也ハ彼ヨリ推量ル上ニテ云也重複ニ似テ重複ニ非夫ノ遅ク歸リタルニ妻曰待兼マシタ此ハカント云タル也夫曰サウデアロ此ハさと知タル也此チ反ノコノ歌チ解スベシ

カントイハチハサウトハシラヌハ人ノ常情也ツレチ艾チ借テヨク云ナシタルハ歌ノ妙ト云ベシ淵ハコノ重複ガ心ニ叶ハヌニヤヨクモ解カズ或ハ漢文ニ聞キ故ニヤ

明ぬれはくるゝものとは志りながら猶うらめしき
朝ほらけかな 後拾遺 女のもとより雪のより待りける日かへりてつかはしける 道信

コノ一首ノミニテハ右ノ端書ハ用ヒラズ別ニ略ノ書ヘシ
コノ歌ハ俗サマニテヨキ歌トテコノ巻ニ入ルニハタラズ

なげきつゝ獨ぬる夜をあくるまはいかにひさしき
ものとかいしる 拾遺 入道攝政まかりたりけるに門をおそくわけければ立わつらひぬと
いひいれて待りければよみて出しける 道綱母

コレモヨキ歌ト云バカリハアラズ常ザナリ

わすれしの行末までいかたけれいけふをかまりの
命ともかな 新古今 中關白かよひそめ待りける 儀同三司母

わすれしハ其誓ニ行末長ク忘レマシト云ケル一句ヲ捕テ云也故ニわすれしの行末トツケタリ略言ニモ非の
ナ略言ト云ハ淵ノ鈍解ナリ

わすれしの行末ハ悪カラヌ詞也巧トモ妙ニ褒テヨシ淵ハ萬葉ニナキ詞也後世也ト請リタリ此ハ淵ノ僻論ナリ
万葉ノ内トテモ人丸赤人ナドハ其時マデ人ノイハザリシ詞ヲ言出サリヤハ古事紀ニ載サル詞多シソレチ一

々請ヘキヤハ凡歌ニ善惡巧拙アリ善惡巧拙ニ古今ナシ但ソノ善惡巧拙ノ姿ノ世ニ随テカハルノミノ姿ニ我
ノ愛憎ヲ加ヘテ善惡ヲ古今ニ分ツハ一人ノ私言ナルニ譬ヘバ鱷ヲ嗜ム人鱷ヲ嗜ム人相語テ鱷ノ長短ヲ競
争カ如シ嗜好ハ吾ニアリ長短ハ物ニアリ長短ハ定品アリ嗜好ハ人々不同不同ノ嗜好ヲ以テ定品ノ長短ヲ斷セ
ント欲ルハイカナル心ヲ

好古ノ癖アル人ナラバ常ニ古書ノミヲ讀テ自モ頑ニ面白ケナキ歌ヲ詠テ人丸以下ノ歌詞ハ目モヨセズ手モ觸
スツヨキ

伊周公ハ初内大臣マデ進タレト太宰左降ノ時内大臣ハ落タリ其後歸京ノ罪赦サレタレト猶復任ハナカリキ又
ソノ沈淪ノ悲歎ヲ慰メントテ准大臣ノ命ヲ賜ルコノ處ニ淵ノ解差謬アリ儀同ハ唐名ヲ取テ私ニ稱スルノミ宰
相右林金吾ノ類ナリ朝廷ノ官名ニ非

モシ復任内大臣ナラバ即三大臣ノ一ツ也準ノ字用ナシ又列大臣下大納言上ト云ベキヤウナシ
唐ノ開府儀同三司ハ開府ノ儀式ノ三司ニ準スルノ儀ナリ三司ハ此ノ三大臣ノ類也儀同ハ準位ナレバ列ハ三司
ノ下ニ在實ニ準大臣トヨク似タルモノ也

瀧の音ハ絶て久しくなりぬれと名こそ流れて
猶聞えけれ 拾遺 大覺寺に人にまかりたりけるにふるき瀧を見てよみ待りける 公任

あらざらんこの世の外の思ひ出に今ひとたひの

あふことわかかな

後拾遺

こゝち例ならず待りけるころ人のもとに遣しける 和泉式部

あらずハ不在也死チ云わらざらんハあらずわらんノ轉也ざらトざりハ似タル詞ツキ也但ざりハ前ニカ、ルギ
らハ後ニカ、ル必シモ反切ニカ、ハルコナシイツレモ皆轉ナリ

凡淵ノ約ト云ハ全ク反切ナルヲソレ隠ノ云也又反切ニ合ヌ處ニハ更ニ轉トイヘリ此ハ快カラザレハ強テ出
セル解也カクムツカシイハズ一ツノ轉ニテスムベキナ

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし

夜半の月かな

新古今

はやくより童どもたち待る人の年ころへて行あひたるかほのかにて
七月十日ころ月にさほひて歸り待りければ

紫式部

雲隠ハモト雲ニ包マレテ光ヲ失フヲ云詞ナレトソレナ一轉ノ山ノ端ニ入チ云ナリサレハ端書ニ十日比トイヘ
リ十日比ナレハ夜半ニハ地平ニ入ベシモ實ニ雲中ニ入チラパイツニテモアルベキ也端書ニカクハアルマ
シキコニヤ雲ノ隙行月ナドイフ説ハア、凡集ハ古今ニ限ラズ端書ニ心ヲ付テ解スレバ其失スクナシ
雲隠ヲ禁忌トスルハ源氏雲隠ノ卷ヨリ出タルコナレドコノ物語大ニ世ニ行ハレテヨリ後ノコナレバ作者ノ紫
ハ却テ知ラザリナリ此ハ時ノ拍子ナリソレチ古意殘ト褒賞スルハ當ラズ

有馬山猪名の篠原風ふけいいてそよ人を

わすれやははする

後拾遺

かれくなるおのこのおはつかなきなどいひたりけるに
よめる 大貳三位

猪名野ハ今伊丹ノ北ニコノ名殘リタリ猪名河モ流レタリ昔ハ曠野ニテ熊篠多ク生ケラシ京ヨリ有馬温湯ニ赴

ク道ナリ今モコノアタリニ官道アレハ古今ノ變遷ハ知カタ

してハ別ニ振起ス詞也俗言ノ扱ニ近シ文中ニいてヤト云チ弄フベシイデニテ句チ斷タルヤウニ心得ベシ下ノ
そよハコノ二字チ超テ上ノ篠風チ受ル也

そよハ篠ノ風チ得テそよノ聲スルチ取テ微小ノコトヲ喩テ云也忘ル心ハ少モナマト云ノミそれノ解ハア、シ

そよハ俗言ノソツトモニ當ルベシ

やすらいてねなまじものを小夜ふけてかたむくまての

月を見しかかな

後拾遺

中關白少將に待りける時はらからなる人にものいひわたり待りけりたの
めてこそりけるつとめて女にかはりてよめる 赤染衛門

約束ノ必ト云テ女ニ頼テ待タスチたのめト云タノマシメルノ義也契トハ少シカハレリ淵ノ解當ラズめノ字ニ
心付ザリシトミ我苦チ受ルチくるしむト云人ニ苦チサスルチくるしめるト云むめノ變頼ト同
かたむくかたよくむふ横通同韻ナレハ通ハシタル也此ニ清濁ノ論ハイラス也淵又清濁ノ傳ト云ハイカナ
ル秘訣アリヤチソノ傳ナルベシモ韻鏡家ノ言ナラハ一抹ノヨシ
コノ歌ねなまじト悔タルヤウニ言ナシテ情ノ切チ述ベ且恨チ添タル也

大江山いく野の道の遠けれいまたふみも見す

天の橋たて

金葉

和泉式部保昌に於て丹後國に侍りける此都に歌合の有けるに小式部の内侍うたよみにとられて侍りけるを中納言定頼局の方にまうてきて歌はいかにせさせ給ふ丹後へは入つかはしけんやいかにこゝるもどなくおほすらんなどたはむれて立けるを引どゝめてよめる 小式部内侍

いづ野ハ往野ヲ掠タル也イッパシノ野ノ意ニ非

いづ野ハ大江山ノコナタコアリ金ヲ採礦アル所也

大江山ハ大山ニテ丹後へ往ニハツノ麓ヲ繞テ行也跡ニ非慈鎮ノ歌ニ大江山ト云ハ只北方ノ高山ヲ指テ大江

山ト云タルノミ實ヲ考ヘタルニ非モトヨリ實景ノ詠ニモ非且地理ノ證ニ引ベキ人ニモアラザルニ人毎ニ慈鎮

ヲ引テ證トスルハイカニツヤ甚シキハ京ヨリ丹波へ通ル老ノ坂ヲ大江山也ト思ヘリ此モ慈鎮ヲ證トスル也此

ハ坂也山ト云ベキモノニ非洲ノ解ニ山城ヨリ丹後へはこの山を越るトイヘレバカノ俗説ニ惑タルナラン

近畿ノ地理ハカク正セテ遠國ハカニ及ハズ毎ニ洲等ニ誑サレンコ口惜キコ也

いにしへのならの都の八重櫻けふ九重に

にはひぬるかな 詞花

一條院の御時奈良の八重櫻を人の奉りけるそのおり御前に侍りければ其花を題にて歌よめとおうせと有ければ 伊勢大輔

櫻ノ花片ノ一重ナルハ何ニテモ一重櫻ト云花片ノ多ク幾重モ重ナリタルハスベテ八重櫻ト云ナリソノ中ニ各數種アレソレハイハズコノ二ツチ大名トスル也諸書ヲ觀ニ八重櫻ヲ南都名産トス南都ニ始マリタル花ニヤ繪ノ隈取ノ類ヲ何ニテモにはひト云花色ニテハ光彩ノ照映ヲ云香ニテモ其類也弓ノ藤卷ニモにはひ藤ト云モ

ノアリ太ク巻タル次ニ細ク巻タル也 コノ形ナリ亦光彩ノ意

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の

關ハゆるさし 後拾遺

大納言行成物語などして侍りけるに内の御物忌にこそはとていそき歸りてつどめて鳥の聲にもよふされてといひおこせ侍りければ夜よかかりけん馬の聲は函谷關のよにやといひつかはしけるを立かへり是は逢坂の關にて侍るといふはよめる 清少納言 つどめてハ早朝也晨目ノ義ナルヘシ立かへりハ其使再來ナリ此ラハコノ小註ニ差アリ

世中第一ナルコトヲ世ニ勝レタリト云ヨリ又世中ニカハルコトハアルマシキナドイフ時ニモ世にト云テ通ズル也

只甚シクイフ時ニ用ルヤウニナリタルハ語ノ用ヒ來ト云モノニテ理ニテツヨクハナサレズ逢坂ヲ許スコトハ中

ニ無コトト云テハコノ歌ハ通ゼズ虚雜ニテ人ヲ欺トモ逢坂ノ關ハ屹トナラヌツト云ノミ也世中男女ハ此ヲ許

コト常ナレバ淵ノ云タルヤウニハ歌ニハ詠レズコノ謬ハ字義ノ理ニテ推ユヘ也

世におそろしき世にわれなる世にすさしき皆一等ノ語也

今いたゝ思ひたえなんとはかりを入つてならて

いふよしもかな 後拾遺

伊勢の齋宮わたりよりのほりて侍ける人に去のひて通ひけるを おほやけも聞しめしてまもりめなどつけさせ給ひて忍ひに毛通はずなりにければよみ侍りけり 道雅

朝はらけ宇治の河霧たえくにあらわれわたる

瀬々のあしろ木

千載 宇治にまかりて待りける時よめる 定頼

うらみわひほさぬ袖たにあるものを戀にくちなん
名こそおしけれ 後拾遺 永承六年内裡歌合 相模

恨ミくテソレニ困倦タルヲうらみわひト云

ヌレタル袖ノ乾隙ナケレバ腐ルニ定リタルト也此ヲ惜マヌニハアラチ正輕キヲニテソレハソレトソ唯名ノク
チナンハ最口惜キト也トイヘリあるハ袖ノ腐ニテ云テサテ名ノ朽ルト下ヘツ、ソ也

淵ノ解聞エタルヤウニテトカクコノ歌チ心得ヌヤウナリ小註ノ一説モソレヲ辨タル説モ皆當ラズ三人ナガラ
たにノ詞チヨク知ラヌ故ナルベシた、にの略當ラズ強くいふモ圓ナラズすらノ解ヤ、近シ

今世ノ歌人ノさへト詠タルハ大抵たにニ改テヨシ

あるヲ袖ノ存在無事ト云ヤウニ解タルハイカナル處ヨリ出タル説ソヤ少ニテモ歌チヨム者ノ口ヨリハ出ガタ
キ惡説ニツ

春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ
名こそおしけれ 千載
物かたりし待りけるに内侍周防よりふして枕とかなど忍ひやか
にいふと大納言忠家は是を枕にとて肘をみすの下よりさし入て待

りければよみ待りける

周防内侍

心にもあらてうた世になからへはこひしかるへき
夜半の月かな 後拾遺 例ならずおはしましてくらゐなどさらんとおはしめしける此月のあ
かりけるを御覽して 三條院

嵐ふく三室の山のもみち葉ハ龍田の川の
錦なりけり 後拾遺 永承四年内裏歌合によめる 能因法師

淵ノ解中ニ古歌チ多ク引タリ然ルニ古今ニ又神なひの三室の岸やくつるらん龍田の河の水の濁れるノ歌アリ
此ヲ引ザリシハ如何ニツヤ已カ説ニ障礙アル故コトサヲニ引殘シタルカソレナラハ私心ナリ懲スヘシ

世中ニ名所故跡ノ地ノ違タルヲサマ、ナリ此チ正サントスルニハ古歌ハカリヨキ證據ハナキナリ寺モ社モ
使ニ隨テ遷ス也池川モ堀替ルヲアリ流チ徒スヲモアリ古名チ慕テ里人ノ造リナセルモアリ參詣人ノ錢ヲ貪テ

ミタリニ造ルモアリ國主ノ奢ニ造ラスルヲモアリ今ノ地勢チ以テ古歌チ正サントスルハイトカクシヤ又解中
ニ引タル古今深養父ノ歌コソ證トスベキ第一ナルベケレソレチ却テ謬ト云タルハ如何ニツヤ

神なひの山を過て龍田川を渡りけるにちみちの流れけるをよめる

清原深養父

神なひの山を過行秋なれの龍田川にそぬさはたむくる

此ハ歌合ニモ非常ノ題歌ニモ非親ヲ往テ詠タル也端齋モチカナルチイカテ誤トハ云ベキ淵又イフ深養父端

書とはねしはかりに設けて書しものどもモシ京ニ歸テ書タラバサモ云ヘシ是ハソノ所ニ到テ紀行ノ文ノ如キ端書ナルナイカデサル悪口ヲナスベキヤ淵又云万葉の比まての歌ハその處へいたりてよみし故に違ひなし古今の比にはそらに設けよむ故かゝる誤りすくなからざるなりソレハ題歌ニコソ有ベケレ深養父ハタシカニ親ヲソノ處ニ到テ詠タルニ紛レナキチカ、ル難チツクルハ無道ト云ヘシ

右ニ舊解ノ謬ヲ評シタレドカク入紛レタルコトハ辨スルニ隨テマスマス晦クナリモテユクモノナレバ此ヲチ打捨テ試ニ吾一定ノ説ヲ左ニ記ス也更ニ誤アラバ後ノ人正シタマヘ

御室考

河内國より大和にこゆる山道かなくあるか中に今いふくらかりたうけなん昔の龍田越ふめりすふはち龍田山なり神武紀に見えたり是は高市郡ありこの山に神南備神社おはします故にこの山を御室山ともいひけりこの山の麓にあかる、河はおのつから龍田河と呼あり 古今集に

龍田川紅葉みなれてあかるめりわたらは錦中やたえあむ

龍田河もみち葉流る神なひの御室の山に時雨ふるらし

神ふひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきるこゝちこそすれ

立田姫たむくる神のあれはこそ秋のこのはれぬさごちるらめ

神ふひの山を過行秋ふれば龍田川にそぬさはたむくる

神ふひの三室の岸やくつらむ龍田の河の水の濁れる

麓ふる河ふれこそその末流れわたればすこし程をへたてたる處にても河のほとりにて山を思ひてよみたるもあるへし此らハ皆高市郡の歌なり左の註とて飛鳥川とわきたるハわろしかく龍田御室と山の名ハふたつふれとも歌にハおほく御室をよめるハ歌の中に龍田河てふ詞あるにハかならず相避て御室山といふふりうちかさねて龍田川龍田山といふへきにはあらずかし又小倉の嶺ともよめれこゝに用ふければ論せず中古いつのころにか平群郡にこの神南備神社を遷し奉りけんおふそ宮うつしてふものはまたく引もて往にはあらず分身勸請などいひてもこの社ハ其まゝにてへちに宮つくりしていはひまつることふれハこの二郡おのゝ神南備神社まじゝてごもにその處を御室山といふふりある人ハ神社います山ハいつれも御室山といふへしあといへり此ハいとわろし萬葉集に神なひの三室の山の帯にせる飛鳥の川の巽

延喜式に平群郡神南備神社を載たり萬葉にかくよみあはせたる歌なほ多しされハ
平群ふるハ同じく御室の名ハあれども龍田の名ハあしあかあれハ龍田ハ高市郡の
山の本名ふり後に神社によりて御室の號をなたるのみ平群郡の山もも其名ハ有
けらし後に御室の號の名高くふりて其本名をうしなひしなるへし
今里人のいひならはせるも龍田てふ處ハいつこにやいとも淺ましきとふれハ
考にいらす

さひしさに宿を立出てなかわれはいつくもおなし
秋の夕くれ 後拾遺 題をらす 良運法師

宿ヲ立出ハ門ヲ出ル也門前ニ徘徊ノ何方ニモ淋シカラヌ處アラハ往テ自慰メントノ心用意ナルベシ庭ニテハ
當ラズ又庭ナラハ宿ヲ出ニ非又庭ナラハ垣牆アリテ諸方ハミニエガタカルベシ
ながめハ腕ノ本義ニ近シ目ヲ左右ノ方々ヲ望也有憂ノながめトハ同カラズ
こく豎音ノ通ニテ是モ非モナキ也淵ハイカデ通トイハズノ頭説ヲナスヤ
詞ノセハくシキヲ嫌フナラハ春風を吹秋風を吹秋の初風夕暮の空ナド多クアルヲコトくシ舉列ヲテ非ス

ベキヲ外ヲ舍テ只秋夕ノミ誦リタルコトハイカコソヤ蓋後世三夕ナドノ譽ノ高キヨリ淵ノ妬心起リテカクハ云
シナラン妬心アリテハ議論ハ必正カラヌモノゾ

夕されハ門田の稻葉おとつれてあしのまろ屋に
秋風を吹 金葉 師賢朝臣の梅津の山里に人にまかりて田家の秋風といふことをよめる 經信

夕されトハ夕時ニナリ來ルト云詞ナリ萬葉ニ夕去り來ノ詞アリソノ略ナルベシコノ去ハ假字ニテ夕ヘコナリ
シルヲ去り來ト云シナリザリハベコナリノ轉音也トモ云ベシ去ノ字義ニ拘ルハアシ、
さハ濁リハハ清ムベシハハ濁リテヨキコナレド上ノさノ濁ヲ受ル故ニ清ムナルベシ音使ニヤ譬ハハソロク
春メキソルヲ春されト云也

假字ノ清濁ニ泥ムハ淵ノ家法通論ニ非萬葉ニ繼クト書ベキ處ニ衝ノ字ヲ書タリコノ類猶多シイカデ萬葉ノ清
濁ニテ人ヲ嚇スベキ

文ニ夕ざりト云ハ今俗ノ夕方ト同シ體用ノ説ハア、
淵萬葉春之在者ヲ引テ者ノ濁音ノ證トス然ハ濁音ナラデハ者ノ字ハ決ソ用ヒヌト云ナリ然ルニ萬葉第一ニ曰
八間跡國者曰秋山吾者曰野守者不見哉曰時無會雪者落家留問無會雨者零計類曰百機城乃大宮人者曰青香具山
者曰此美豆山者曰青管山者曰吉野乃山者一卷ノ内ニ已ニ然リナホ多ク有ベシコレヲノ者ハイカデ濁音ニ讀ベ
キヤ淵ハ是ヲモ濁音ニテヨミクルコヤサラデハ證ヲ引タル詮ハナキ也

延喜式に平群郡神南備神社を載たり萬葉に於てふみあはせたる歌なほ多しされい
平群ふるは同じく御室の名はあれども龍田の名はふしあかあれは龍田は高市郡の
山の本名ふり後に神社によりて御室の號をあたるとのみ平群郡の山ももど其名は有
けらし後に御室の號の名高くふりて其本名をうしなひしなるべし
今里人のいひならはせるもど龍田てふ處はいつにやいとも淺ましきとふれは
考にいらす

さひじさに宿を立出てなかむれはいつくもおなじ
秋の夕くれ 後拾遺 題あらず 長運法師

宿ヲ立出ハ門ヲ出ル也門前ニ徘徊ノ何方ニモ淋シカラヌ處アラハ往テ自慰メントノ心用意ナルベシ庭ニテハ
當ラズ又庭ヲラバ宿ヲ出ニ非又庭ヲラバ垣牆アリテ諸方ハミエガタカルベシ
ながめハ院ノ本義ニ近シ目ヲ左右ノ方々ヲ望也有憂ノながめトハ同カラズ
こゝ堅音ノ通ニテ是モ非モナキ也也淵ハイカテ通トイハズノ頭説チナヌヤ
詞ノセハくハキチ嫌フナラハ春風を吹秋風を吹秋の初風夕暮の空ナド多クアルチコトハくハ擧列チテ非ス

ベキチ外チ合テ只秋夕ノミ請リタルコトハイカコツヤ蓋後世三夕ナドノ譽ノ高キヨリ淵ノ妬心起リテカクハ云
レナラン妬心アリテハ議論ハ必正カラヌモノゾ

夕されハ門田の箱葉おとつれてあしのまろ屋に
秋風を吹 金葉 師賢朝臣の梅津の山里に人にまかりて田家の秋風をいふことをよめる 經信

夕されトハ夕時ニナリ來ルト云詞ナリ萬葉ニ夕去り來ノ詞アリソノ略ナルベシコノ去ハ假字ニテ夕ヘコナリ
クルチ去り來ト云シナリザリハヘコナリノ轉音也トモ云ヘ去ノ字義ニ拘ルハアシ、
さハ濁リハハ清ムベシハハ濁リテヨキナレド上ノさノ濁チ受ル故ニ清ムナルベシ音便ニヤ譬ハハソロク
春メキソルチ春されト云也

假字ノ清濁ニ泥ムハ淵ノ家法通論ニ非萬葉ニ繼クト書ベキ處ニ衝ノ字チ書タリコノ類猶多シイカテ萬葉ノ清
濁ニテ人チ嚇スベキ
文ニ夕ざりト云ハ今俗ノ夕方ト同シ體用ノ説ハア、

淵萬葉春之在者チ引テ者ノ濁音ノ證トス然ハ濁音ナラデハ者ノ字ハ決ノ用ヒスト云ナリ然ルニ萬葉第一ニ曰
八間跡國者曰秋山吾者曰野守者不見哉曰時無會雪者落家留間無會雨者零計類曰百機城乃大宮人者曰青香具山
者曰此美豆山者曰青管山者曰吉野乃山者一卷ノ内ニ已ニ然リナホ多ク有ベシコレヲノ者ハイカテ濁音ニ讀ベ
キヤ淵ハ是チモ濁音ニテヨミケルコヤサラデハ證チ引タル詮ハナキ也

凡淵ノ證トテ引タルハ大抵コノ類也已カ説ニ合タル處ノミチ引合ザル處ハ引カズ或直ニ誤字トテ棄ル也チソ
ノ證ヤソノ中ニ婆ヲ濁音ノ證ニ引タルハイカニヅヤ世俗老女ヲ婆々ト呼ニ濁音ナルヲ聞ナレテ必濁音也ト思
ヘルナラン婆ハ波ト同音也波ノ草書ヤ、變ノ假字ノはトナル二字ナガヲ濁音ノ定メハナキ也

あしのまろ屋簷ニテ葺ハシレタル也但常ノ家ハ少サシ必四隅ニ柱ヲ立テ上ニ屋ヲ上ルモノ也此ハ至テ輕
キ處ナレハ四隅ニ柱ヲ立ルヤウナレドソノ柱ノ上チ中ニ聚メテ繩ゴテ結束ノ其旁チ簷コテ包ム故ニ屋ト云モ
ノハナクテ上ハ簷ノ口チ括リタルヤウ也簷ノ末ハ地ニツク其形圓ナル故ニまろ屋ト云也今非人ナド田間ニ廬
チ結テ居モノ多クカ、ルモノ也詩ニ中田有廬ノ廬ハコノ類ナルベシ後世ニハ蝸牛廬ノ名アリ全クまろ屋ナル
ベシ又賤かゝせ屋トイヘルモ同物ナラン屋ノ構モナシ鉢ナド打伏タルヤウナレバカク云ナルベシ然レバまろ
屋ハ廬ノ字ノ本義ニ叶タリヤ形如覆盆トモ云ケル

上ニ聚ルハ四柱アル物ナレハ其形圓ナラジト疑フ人アルベシ此ハ非也イト狹キモノナレバ少ニテモユルヤカ
ナラント願テ柱ノ間横ニ木竹ヲウツタノ少シ張出スハ定マリタル也ソレ故形ハ必圓ニナルナリ圓ト云モ實ハ
半圓也彈丸ノ如ク正圓ナル物チ中ヨリ二ツニ破リテ其一ツチウツブセタル形ナレバ猶圓屋ト云也
木の丸殿ハ此トハ大ニ異ナリ混同スルハ謬也丸屋ノ丸ハ全形ノ圓也丸殿ノ丸ハ柱ノ圓也

凡宮殿ノ柱ハ方劉トテ四角ナルモノ也コノ行宮ハシバノ旅館ナレバ文飾ヲ施シ民力ヲ勞スルヲ厭ハセ玉
ヒ且風雅ノ趣ヲ愛シ庶民山居ノ營構ヲ學ヒ塵外ノ室ヲ作り玉フ也故ニ方劉チナサス細キ木ヲ采テ其マ、ニ柱
トスル故丸ノ稱アリ又丸キノミナラズ其木ノ皮チモ去ラズ色黒シ故ニ又黒木ノ稱アリ此チ丸屋ト同物ト云ハ

崑崙香椒ト謂ベシ

音に聞高師の濱のあたなみはかけしや袖の
ぬれもこそすれ 金葉 堀河院の御時覽書合によめる 紀伊

けそらニ懸想ノ字チ用來レルハ由アルコナルベシ僧徒ノ口ヨリ出テ世上ノ常語トナルコノ外ニモ多キコナ
レバ佛書ノ出處ヲ尋ルニ及バズ且歌ニイラス詞ハ常語チ用ルコト常ナレバ論ニタラズ

あた波ト云波ハ元來ナキモノ也コノ歌ハ高師ノ濱ノ波チ表トノ高ノ字ニ位ノ高チモタセ波ノ上ニあだノ二字
チ添テ浮名チキカセタリ袖のぬるハ濡衣ノ也此チ織巧ト云コノ時代ニ大ニハヤリテ歌ノ風チ傷ルニイ
タル皆言掠メナリ女ノ歌ナレバコソ疵トハイハチ男ノ歌ニテ相聞ニモ非ハイカトアル織巧ハ俗言手ズマ也
女ノ身卑ケレバ公卿チ高ト云也此ハ何人ヨリ言懸タル歌ノ返事ナルヤシラチモソノ詠懸タル人チ指也カ、ル
高華ノ人ハ一旦卑キ女ニ言ヒヨルコトアリモトケヌモノナレバ相手ニハナラヌトハチル也名高ク聞えたる
あふ人ハ常ラズ鹽なき時の波漁もならぬ大浜ミナ當ラズスベテカノ言掠メニ心ツカズソノ万葉チ解スル如ク一
字ヅ、ニ解チ施ユヘ歌ノ意チ失フナリ丁寧モヨキ程ノアルベキコソ題ニ心チ付テミルベシ贈モ答モ皆至
極ノ虚談ナリ只ヨキ歌チヨマセテ一坐ノ慰トシ玉フノミ

高砂の尾上の櫻さきにけり外山のかすみ

たゝすもあらなん

後拾遺

うちのおほいまうちきみの家に人よ酒たうへて歌よみ侍りけるに遠に山の櫻を望といふことをよめる
匡房

高砂ハ高土ノ義也即山ノ一名漢語ヲ證スルコト及バズ
山ノナダレサガリタル裔ノ地ニ遠カラヌ處ヲ尾ト云尾ヨリ上ナレバ山ノ半腹ナリ頂ト尾トノ間ニアタルベシ
大抵櫻ナドハ山ノ絶頂コトハサカヌ物也

外山ハ万葉コトシ後世ニ出タル詞ニテモアシカラヌ也コレヲノ詞ノ歌ニ入ハメツラシカラヌト也強テ古チ探
ルニ及バズ凡高山ノ麓ニハ必小山多クアリ屢登リ屢降テ後高山ニ登ヘキ也富士山ノ如ク一ムキノナダレサガ
リテ平地ニ至ル山ハ外ニハナキ也ト知ベシソノ小山ハ高山ノ外チ繞ル故コト外山トイフ也外コト小ノ義ハナケレ
ト小山ニ非ハ別コト一山ノ名アルベシ外山トハイハズ故コト小ハ自然ノト也漢文ニテイハハ低山ト云ベシ短山ト
ハ云カダシヤ

凡物名地名万葉ニ無トテモ必古ヨリ無トハ定ム巨有テモ昔歌ニヨマザリシトモアルベシタトヘハ毛詩三百篇
ニ漏タル草木チミテコレハ秦漢以來ノ草木也周以前ハナカリシモノトテ三百篇チ證トスルカ如シ
櫻ハ半腹ニ咲タレド元來高山ナレバ半腹ナレト外山ノ頂ヨリ高ケレバ霞ダコナクハ人目ニ隔ツルモノナシ
万葉ノ文字ハイト無道ナルモノナレバ取テ證トハナシガタメタトヘハ山頂ナドノ細ク立上リ櫻ノ如クナルチ
峰ト云富士白山ナドノ大山チ岳ト云横ニ長ク馬脊ノ如ナルチ岡ト云山ノ撓ミテ人ノ踰度ルベキチ嶺ト云カク
サマノ文義ノ異アルチ一コトニヨミ定メテ人々心ニ任セテ借用ルコトナレバ當ルベキヤウナツレチ又後人

カ取出ノ證トノ訓詁チ争フ是更ニイカナル無道ツヤ尾ニ兩義ナシ淵ハ峯也ノ説チ立テカニ任セテ大抵ハ押付
タレド索性ノ峰にも尾にもノ歌ノミハ力及バザル故別ニ山末ノ解チ作り尾ニ兩義アリト云皆剛愎ノ罪ナリ是
ヲ汰ト云テ漢人ノ大ニ憎ムト也

萬葉に峯峯丘の字をどもに乎とよむトノミ云テ證歌チ引ザルハ實ハ證ナキトニヤアラソ剛愎ノ人ハカ、ル癖
アリ

右ノ惡説ノ山チ起ル所チ察スルコト上ノ字チアマリニ輕ク看テ尾ト尾上トチ同所ト思ヘリ蓋イヘラク尾チ山裔
トスレバソコナル尾上ハ高カラズ其コトナタル外山ニ隔ラレテハタトヒ霞ハナク尾上ノ櫻ハ人目ニカ、ル
マジキトチナソカノ惡説出タルナリ尾ノ上頂ノ下ハ山ノ腹ナルニ心ツカサリシナラン

うかりける人を初瀬の山おろしよはけしかれとは
いのらぬものを 千載 稚中納言俊忠の家に戀の十首の歌よみ侍りける時祈不達戀といへ
る心を 俊頼

初瀬ニ始テイヒヨル心チ掠メタリ末ニ祈チイハントテ先コトニヨソナガラ地名チ掠メタリ

山おろしよハ女チ指テ君ガツレナクアラノシキハ正シク山下風ナルヨト罵ル心チ掠メテ此ニ添タリコレハ
女流ノ掠メ歌ニナラヒタルナリ歌チ二體ニヨミシトハカ、ル歌ノ平生ノ歌ニ替リタル姿ナルチ云ナルベシ女
トキノ歌ナレハ男ニテモ歌ノ純ニハナテズカリナガラコノ歌ハヨキ歌ニハ非

歌ノ右ノ小註ニ歌ハ其比ならふ人なしトハ一人ノ私言也ならふ人ハ基俊ナリカレハ勝ルトモ劣ルコトハナシ一

アルベシト聞人アルベキヤハ無理言ト云フテ理言ト書テ通ズベキヤハ此ハ淵ノ汰ナリ妄ナリ文理ヲ辨ヘザルナリソノ引タル勢語ノわれてあハントハ堪ガチテ今宵ハ體面ヲ破テ是非トモニ逢ベシト云也金葉ノわれてそ出るハ出ガタキ處ナ何事モ打捨打破テ出タリトテ三日月ニカケテ云シナラン並ニ略語ニ非淵ハコノ兩語ヲ誤解ノ又ソノ誤解ヲ證トソコノ歌ヲ誤解シタルナリ

末にあハハ水ノ合也ソレテ人ノ逢也ト思ヒタルガ淵ノ第一ノ謬也ソレ故ニ序歌ノ説ヲ忌テそヘ歌トナセリ萬葉ノ歌ナラバ序歌トミテヨケレド此比ノ歌ナレバ序歌ニ非ト思ヘリ此ハ大ニ誣タル也コノ比トテモ頼政ニ序歌多シソノ後家隆定家ニモ多クアリ俊成ニモアリコノ比ニハ序歌ナシト云證ハ少モナシ

昔人ハ古歌ノ意ヲトリテ詞ヲ少カヘテ我歌トナシタル例多シ後人ハ旁ヨリ難チツケテ許サズ此ハ歌合始マリヲヨリ後年々コノ禁ハ嚴シクナリタル也コノ比マデハサマデ嚴シクハアラフ後京極ナドハコノ禁ヲ犯タル歌多シ淵又イヘラシ然らずは萬葉ノ歌ト意モ言モおなしくなれば少シことなる意あるべく覺カ、ルコトハ其門人ヲ聚メテ誨ヘタマヘカシ此ニテ昔人ノ歌ヲ評議スルハ大ナル間違ナルベシ又云わりなくを略さてわれてといふこと古ヘハみえずカ、ル筋ナキコトハ古ニアルベキヤウナシ後ノ世ニモナシ只加茂翁一人ノ私言ニテ證歌ノトコ上ニミニタリ元來わりなしトハことわりなしの略なりト淵イヘリサテ又われてハわりなしの略也ト云モアヤシキ也略ト云フモサマデ輾轉ハスマシキ也今俗耳つくつくトイフわひるチひるト云皆略ナリモシ此ヲ再ヒ畧ノくとイヒるトイハハ耳つくわひるノト聞得ル人アルベキヤハ況わりなしわかれて有無ノ反アルチ

あはち鳥かよふ千鳥の鳴聲にいく夜ねさめぬ
すまの關守 金葉 關路の千鳥といふことをよめる 兼昌

秋風にたなひく雲のたえまよりもれ出る月の
影のさやけさ 新古今 崇徳院に百首の歌奉りける時に 顯輔

長からん心も志らす黒髪のみたれて今朝は
ものをこそおもへ 千載 百首の歌奉りし時 堀河

ほととぎす啼つるかたをなかむれば唯有明の
月そのこれる 千載 晚閑郭公といへる意をよみ待りける 後徳大寺左大臣

思ひわひさても命のあるものをうきにたえぬハ
涙なりけり 千載 廻らす 道因法師

よてモハサアリテモノ略也

世中よ道こそなけれおもひ入山のおくにも
鹿を啼なる 千載 迷懷百首の歌よみ待りける時鹿の歌とてよめる 俊成

なからへはまたこのころや忍はれむうしと見し世を
今はこひしき 新古今 題志らす 清輔

カ、ル人ノ憂ト云ハ多クハ官途ノ沈滞ニアリ然ラズハ朝家ノ衰弱カ權臣ノ驕恣ヲ歎クナルベシ白氏ノ歎老ト
ハイツレ大ニ異ナルモノヲ淵ハ強テ白詩ニ合セテ理窟メクト難ツケタルハ無道ナリ詞ハ似タル處モアレ用意
ハ大ニ替リタリ此ニ心ツカザリシニヤ

コノ歌詞ノ善ノミニモアラズヨク人情ニモ愜フ今ノ世ニテモ時々アルコト人々を思ヒ當ルコト多シ尤ヨキ歌ニ
テ實情ナリ露ハカリモ難ナシ世事ニカ、ラズ歌ノミチ思案ノ居ル人ハ古人モカ、ル者ト思ヒテヤ實情ヲ除去
テ只歌調ノ古拙直遂ヲ冀フナランカノ歌テフモノハソモイヅクヨリ出来タルモノゾヨク考ヘ玉フベシ

夜もすから物思ふころは明やらて閨のひまさへ
つれなかりけり 千載 戀の歌とてよめる 俊憲法師

長夜ノ盡カタキニ因テ戸隙ヲ恨ルナレハ意ハ重複ニ非レ上ニ明ノ字アル故詞ニ重複アルヤウナレド歌ノ統

ニハナラザルニヤ又思フニ隙ヲ隙光トミル故重複ノ疑アリ只隙空トミレハ難ナシ

つれなき人ヲ怨ルコトツキテ戸隙ニハ恨メシキ也コノさへヲヨク味ハハバだにニ紛ル、コトハナキモノヲ試ニ此
ヲたにニ書改テ玉ヘ一向不通ノ歌トナルベシ

待テ片ノ夜ハ明ヌコカナサテモ憎キ戸隙カナト無罪モノニ罪ヲツケテイフ也

歎けとて月やはものを思はするかこちかはなる
わか涙かな 千載 月前戀とよふ心を 西行法師

かこつ かと コノ二語ハ出處ハ同カルベシかハかゝるノ略ナリ^カ字當ルベキカ因凭モ少ハ似タル處アリ
淵ハ懸托ト定メタレド全ク當ラズ又コノ二字ヲ熟字ノヤウニ云タレドカ、ル語ハ元來無ナリ

俗語ニトリツキヒツツキハ^カ靠ナリカク^カテ恨タイフナドチかこつト云也花ノ散ハ定リタルコトナルチ風ヲ恨ミ
憂ニ沈テ寐ラレヌチ秋夜ヲ恨ミ凡實否ノシレヌコト先取テ^カ靠テ彼ガ所爲トスル類也上ノ歌ノ閨の隙即コレ也

月ヲ見テ涙ヲ落セバ我身ノ憂ハ月ノ所爲也ト取テ^カ靠テ月ニ恨タイフヤウニミユルチかこち顔ト云也

かこどハ少^カカロキ詞ニツ意ハ略同シ此ハ託言ノ兩字當ルベシ作病ノ類

傘ヲ賣者ハ晴ヲ恨ム傘ヲ張者ハ雨ヲ恨ム皆かこつ也

出ガタキ時ニ強テ出ルニハ必祈願寒報ヲ稱スユカデ叶ハヌ時ニ往ザルハ必齋日病氣ヲ稱ス皆かこつ也

貧窮人ノ人ヲ怨ミ世ヲ恨ムハ多クハかこつナリ實ノ有無ニヨラズ理非ニモヨラズ何トナクコノ心ノ生出ニテ

ツルランソノ本ハ我身ニアルコトヲヨク知ラヌ故也知タル者ハかこつコトハ無也

むらさめの露もまたひぬまきの葉に霧立のはる

秋の夕くれ 新古今 五十首の歌奉りし時 寂蓮法師

まきハ杉也彼トモ書タリソノ皮ノ民用多ケレバニヤ木ニ皮ヲ加ヘテ名トセリ楨ハナキ文字也真木ノ假字ヨリ
作出シタルナランヒノキハ柏也是モ皮ヲ用ルコトアレバワヅカナルコト也彼ノ用盛ナルニシカズ又マキトハ皮ノ
卷クニテ名付ケケラシ稱美コトハアラシ楡ハ柏葉松心トテ柏ニ似タル別ノ木ナリ和名ナシ

まき柱まきの戸皆杉ニテ云ナリ杉ハ香木ニテスベテ民用多クソノ品柏ノ上ニ居ベシ是モ深山ニ生ル木ナリ今
世ニ多クノ民ノ常用トナル故コレヲ貴ブ心ナキハ自ラ世ニ随テ見習タル故ニツソノ香氣文理ナド實ハ世ニ並
ツ物ナシ古人ノ貴重シタコト知ベシ

難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ身をつくしてや

こひわたるへき 千載 攝政右大臣の時の歌合に旅宿逢戀といへる心をよめる 皇嘉門院別當

①ハ故ノ字ノ本義ノマ、ニテヨシなからトミルハアシ、

只一夜ノ契ノ故ヲ以テ終身思慕ハアマリナルコト也商人ノイフアハヌコト損ナルコト也カクハスベキヤハト自答
ムル詞ニナシテ猶情ノ切ヲ述ル也なからニテハ下ノやへき皆閑字トナル

終身思慕ハ後來ノコナルヲソレヲ兼テ思フル意也即旅宿ニテ詠タル歌ニナシタル也

玉の緒よ絶なはたえねなからへは志のふることの

よはりもそする 新古今 百首の歌の中に忍戀を 式子内親王

見せはやな雄島のあまの袖たにもぬれにそぬれし

色はかはらす 千載 歌合志待りける時戀の歌とてよめる 殷富門院大輔

ぬれにそぬれしニテ句ノ有無ヲ爭ハ文旨ノ甚シキナリ今ノ歌ハ五句ニ定リタルコトナレハ論ハナキコト也但ソノ
一句ノ中ニテ意ノキレタル處アレハソコテハ某ノ字句也ト論スルコトアリ定句ニテ云コトハ非

雄島ハおしまト書ベシ小島ハとしまト書ベシノ清濁ハ上ノ字ニカ、ルコトナレハ雄しまハ濁リ少しまハ清チ
ヨシトスおしまハ高ヨリ降ルをしまハ卑ヨリ登ル音便ナリ淵ハ只古事紀萬葉ノ滅裂ナル假字ヲ證ノ硬説ヲナ
スノミおをノ大小ニテ分ル、コトヲラズミダリニシノ清濁ヲ爭ハ無益ノコト也

紅涙ハ十和ノ故事アルノミ周易ノ泣血ハ別ノコト也此ニハ引匠

第四句ぬれにそぬれしトイハ、ヨク通ズベシ作者此ヲ知ザルニ非但ぬるれナトイフカタクナシキ詞ハ女ノ口
ヨリ出サル、物カハトテぬれにそぬれしト詠タルナリ此ヲ女流ノ風ト云也コノ歌ヲ解スルニハぬるれニテ解
スベシ女流ノ詞ニ拘ルコトナシ

きりくす鳴や霜夜のさむしるに衣かたしき
獨かもねむ 新古今 百首の歌奉りし時 後京極攝政

コノ歌ハ我女コナリテ詠タルナリ宇治橋姫ヲ思寄ケン

コノ衣ハ常ニ身ニ纏フ衣ニ非夜ノ衣ナリ夜ノ衣をかへしてそぬるトヨミシト同今イフ夜着也かたしきトハ夜着ノ片身ヲ敷テ云常ニ夜寐ルニハ下ニ衾ヲ敷テ上ニ夜着ヲ打着ルナルヲ物思アル時ノ假寐ニハ衾ヲ敷コトモナリト夜着ヲ引ヨセテソノ片身ヲ下ニ敷テ衾ノ代リトシカク身ヲ上ニ着ルナリ此チかたしくト云也今ノ人モスル一也編笠餅ト云ソノ形ニテ名付タルベシねハ當ラズ身ニ着タル衣ハ敷トイフ巨

きりくすハ蟋蟀ナリ今大和ノ俗此チヤマコホロギト呼ナリ豊後國ニテハキナツト呼促織ハ別ニ一蟲也和名ハタチリ其音機織ニ似タリギイチヨイト鳴故ニ自ラカ、ル名ヲ得タリ蟲音ノ機織ノ音ニ似タルハ此蟲ノ外ニハ無ナリ此ハ兒童ノ捕ヘテ弄物トシ籠ニ入テ畜フモノ也此チきりくすト呼ハ俗説ナリ淵ニ限ラズ諸家皆コノ俗説ヲ開慣テトニカクニ蟋蟀チきりくすト呼フチ嫌フ淵ハ直ニ此チ謬トノ和名抄枕草紙マデチ謬誤也ト云タリサテ萬葉チ引タレハ蟋蟀ト書タルノミニテ假字トテ書タルハ一所モナケレバ證ニナラズ訓ハ解者ノ心ニ任セテ改ルモノナレハ證トスベキヤウナレコノ證歌ノ中ニ宿不勝爾チいねかてなくにトヨマセタリソレニテハ寐ヤスシト云意ニナリテ歌意ニ反ケリいねわへざるにトヨムベキカ吾屋前之チわがやどのトヨマセタレドソレニテハ前ノ字チ書タル詮ナシわかにはのトヨムベキカ凡訓ハカ、ル物也人々ノ心ナレバ證トハナシ

ガタヲ淵ハ已ガ謬辨チ奮テ和名抄枕草紙チ皆謬也トノ、セルハ汰ニ非ヤ

蟋蟀チ昔ヨリこほろきト訓タラバコノ歌モ初句こほろきのトイフベシ欠タルコハナシサレド調ハ劣レリ希フベキコトハ非

コノ歌ハ古調ニテ先ハヨキ歌ナリ然ルニ此ハ模擬剽竊ト云物ニテ皆古句也コノ公ノ詞ハ只一句アルノミ也コレチ書付テミレバ

きりくす コレハ蟲名ナレハ子規櫻花ト同シキ寄語ナレバ剽竊ノ難ハナケレハ古句也コノ公ノ詞ニ非

ふくや霜夜の 只コノ七字ノミ後京極ノ詞ニテヤ、古調ヲ離レタリ實ハ下句ニハ似ツカマ味アリ然ニ後人ノ賞ハコノ句ニアリ

さむしるに衣かたしき 古今

衣かたしき獨かもねむ 萬葉

古人ノ詞チ襲取フカクマデハヌマシキコト也吾解ニテハ衣はすてムノ歌モコノ類ナレハ各ハコノ歌ヲ深キカノ衣モコノ公ノホサレシニヤアラン

凡五十首百首ト速詠ニハソノ中ニ古調チ一二首必マシエテ詠ガ當時ノ例トミエタリ定家卿慈鎮和上ナド皆然リ物知ラヌ者ハコノ歌ノ姿チ後京極ノ體ト覺エタリイトチカシクコソ

コノ模擬剽竊ガ深ク淵ノ心ニ叶タルニヤコノ歌チ大ニ歎賞シタリ剽竊家ノ淵ナレバサモアルベシサテイヘテ少かくつゝけてのみつからのものどなれりコレハ祖來ノ徒ノ詩文ニテイヒフルシタルコトナリソノ本ハ李攀龍王世貞等ヨリ出タルコトナリ淵ノコノ評モナホ剽竊ノウチニゾ

附考

和名抄ニ蟋蟀一名木里木蜻蛉古保

右ニ誤ハ少モナシ一類ニテ大小モトヨリ二名アル也今古保呂木ト云モノハ村里イツカタニモアリ又精ク見レハコノ内ニモ大小モアリ形状ノ少差モアリ伊登知ト云名モ俗中ニアリ此少差アリト云然モスベテ蜻蛉ナルベシコハるさハ歌調ニ宜カラヌ故ニヤ實景ニコハるさガ鳴タリヒソレテ歌ニ詠ハさり〜すトイフ是モ人情也咎ムベキコニアラズ且蟲聲ナドハ景物也假テ情ヲ述ルノミ蟲ニ擇ハナキコト也歌ニ用ヒナレタル名ヲ出ノヨキコト也名ハ爭フコトアラズ二名トモニヒカケタル詞ハ歌ニナシ
枕草紙ニ九月晦日十月朔日のはどにたゝ有か無かに聞つけたるさり〜すコレ何ノ誤アルヤ洲ノ促織チ
さり〜す也ト思ヒケルコソ誤ナレ

萬葉ニ淺茅之本蟋蟀鳴毛又云蟋蟀之吾床隔爾

此等ハコハるさト讀テアシキコトハナシサレド戀ニ言懸タルコトモナケレバさり〜すト讀テサハルコトモナシコノ訓ハ解者ノ心任セナリコハるさトヨマデハ叶ハスト云コトハ毫髮モナシさり〜す鳴モさり〜すのト一字多シトテ字餘ノ句ハ古歌ノ常ナリ

幽風ノ詩ニ十月入床下トアレバトテ時候ニ泥コトハナシ東西萬里南北度チ同クセザル土地ナレハ齊同ハ得ガタシ

字書ニ蟋蟀一名蜻蛉一名促織

此コソ大ナル謬ナレ凡詩ノ註解ハ數十家コトカハル物名ミテ説々アリテ一様ナラズ字書ト云モノハソレチ引聚メテ載タルニテ一人ノ定説ニ非尤信用シガタキモノ也字書モ亦數家アリテ各異同アリテ證ニ引ベキモノニアラズ促織チ一名ト云タル特ニ大ナル謬ナリ毛詩集傳ニモカクイヘレド從臣

わか袖は志ほひに見えぬ沖の石の人こそ知らね
かはくまもなほし 千載 寄石戀といへるとと 讀後

歳ニ一度海沙ノ大ニ退クコトアリ國々時節齊カラズ住吉ノ浦ニテハ三月ノ初ツカタ也一里ハカリ沙退テ平地ノ如ク人多ク出遊テ貝拾ヒサドスルナリ此チ沙干ト名ヅクコト歌ノ志ほひハ此チ云ナルベシ平日ノ潮干ノコトニハ非

狹キ入海ニテモ磯ハナレ水心ノ深處チ沖ト云池ニモ沖ノ名アルコト知ベシ大洋千尋海底ノ石チ云ニハ非赤石浦ノ海中ニ大ナル赤石アリソレ故浦ノ名トナリヤト云歳ニヨリ沙干ノ時コト石ミユルコトアリトゾミユザル歳ハ沙干に見えぬ沖の石ナルベシコト類モテヤトルベシ少モ難ハナキコト也沃焦ノ説ハ大ニソラシ

世中ハ常にわかもな渚こく海士の小舟の
つなてかなしむ 新勢撰 題ふらす 鎌倉右大臣

古歌ノつねにもかもなトつなてかなしむチ詠テミダシトテコト歌チ作りタル也打見コトハヨキ歌ノヤウナレド

附考

和名抄ニ蟋蟀一名木里木蜻蛉古体

右ニ誤ハ少モナシ一類ニテ大小モトヨリ二名アル也今古保呂木ト云モノハ村里イヅカタニモアリ又精ク見レハコノ内ニモ大小モアリ形状ノ少差モアリ伊登知ト云名モ俗中ニアリ此少差アリト云然モスベテ蜻蛉ナルベシコハろさハ歌調ニ宜カラヌ故ニヤ實景ニコハろさガ鳴タリヒソレテ歌ニ詠ハさり〜すトイフ是モ人情也谷ムベキコニアラズ且蟲聲ナドハ景物也假テ情ヲ述ルノミ蟲ニ擇ハナキコト也歌ニ用ヒナレタル名ヲ出ソヨキコト也名ハ爭フコトヲズ二名トモニイヒカケタル詞ハ歌ニナシ

枕草紙ニ九月晦日十月朔日のほどにたゝ有か無かに聞つけたるさり〜すコレ何ノ誤アルヤ淵ノ促織ヲさり〜す也ト思ヒケルコソ誤ナレ

萬葉ニ淺茅之本蟋蟀鳴毛又云蟋蟀之吾床隔爾

此等ハコハろさト讀テアシキコトハナシサレド戀ニ言懸タルコトモナケレバさり〜すト讀テサハルコトモナシコト訓ハ解者ノ心任セナリコハろさトヨマデハ叶ハスト云フハ毫髮モナシさり〜す鳴モさり〜すのト一字多シトテ字餘ノ句ハ古歌ノ常ナリ

幽風ノ詩ニ十月入床下トアレバトテ時候ニ泥ヲハナシ東西萬里南北度ヲ同クセザル土地ナレバ齊同ハ得ガタシ

字書ニ蟋蟀一名蜻蛉一名促織

此コソ大ナル謬ナレ凡詩ノ註解ハ數十家ニテカ、ル物名ミナ説々アリテ一様ナラズ字書ト云モノハソレヲ引聚メテ載タルニテ一人ノ定説ニ非尤信用シガタキモノ也字書モ亦數家アリテ各異同アリテ證ニ引ベキモノニアラズ促織チ一名ト云タルツ特ニ大ナル謬ナリ毛詩集傳ニモカクイヘレド從巨

わか袖は志ほひに見えぬ沖の石の人こそ志らね
かはくまもなし 千載 寄石戀といへるとと 讀妓

歳ニ一度海沙ノ大ニ退クコトアリ國々時節齊カラズ住吉ノ浦ニテハ三月ノ初ツカタ也一里ハカリ沙退テ平地ノ如シ人多ク出遊テ貝拾ヒナドスルナリ此ヲ沙干ト名ヅクコト歌ノ志ほひハ此ヲ云ナルベシ平日ノ滿干ノコトハ非

狭キ入海ニテモ磯ハナレ水心ノ深處ヲ沖ト云池ニモ沖ノ名アルコト知ベシ大洋千尋海底ノ石ヲ云ニハ非赤石浦ノ海中ニ大ナル赤石アリソレ故浦ノ名トナリト云歳ニヨリ沙干ノ時コト石ミユルコトアリトアミエザル歳ハ沙干に見えぬ沖の石ナルベシコト類モテサトルベシ少モ難ハナキコト也沃焦ノ説ハ大ニワラシ

世中ハ常にモかもな渚こく海士の小舟の
つなてかなしも 新勅撰 題あらず 鎌倉右大臣

古歌ノつねにもかもなトつなてかなしモテ詠テミダシトテコト歌ヲ作りタル也打見ニハヨキ歌ノヤウナレド

實ハ主意モナク上下シロハ甚シキワロナリワロノ下歌ノ字ヲ脱ス罪ハ上ノ蟋蟀ヨリ少輕ケレ何ノ事ヤヲケノナキ處ハ更ニ劣レリト謂ベシ

人ヲ扶ルニハ手ヲ取テ引立ルモノ也ソノ如ク舟ヲ扶ルニハ綱ヲ以挽キモ維キモスル也舟ノ手ヲ云詞也人ノ手ニ非

こよしの、山の秋風吹からにふる里さむく
衣うつなり 新古今 搦衣の意を 雅經

故郷ノ本義ハ漢ニテ諸國ノ人京ニ出テ居モノ吾モトスミタル本土ノ居處ヲサシテ故郷ト云コノ外諸國ニ往テ住ツキタルモ羈旅ノ客モ本居ヲサシテ故郷ト云此ヨリ一轉ノ京ニ居住シタル人他國ニ在テハ京ノ吾居タル處ヲモ故郷ト云京ヲ故郷ト云ニハアラズ吾邦ニテハ南都ニテモ大和難波近江ニテモ昔帝都ナリシ所ノ荒廢シタルチ古里ト云故郷トモ書タリ故郷ノ字ハ少シ當ラヌニヤ又羈旅中或他國ニアリテ故郷ノ語ヲ用ルハ漢法ノ如シコノ歌ノふるさどハ古里也故郷ニハ非故ニふるさどハモト兩物アリ文字ニテ分テ解スベシコノ歌ハ古里也南京ノ時ハ奈良ハ言ニ及バズ方三五里ノ間ハ皆帝都ノ内ナレハスベテ繁昌スベシ芳野モ都ノ内ナリ人多ク住タルベシ遷都ノ後ハコノアタリ皆荒廢ノ古里トナル特ニ芳野ハ名勝ナリ天皇モ屢遊幸アレハ他ニ勝レテ繁昌スレハ荒廢ノ後モ人ノ懷舊惘歎モ他ノ邑里ニ勝ルベシ故ニふるさとの芳野ナド多ク歌ニ詠タリ然ルニ芳野山ニ限ルヤウニ思フハ非ナリ麓ナル邑里ハ皆芳野ノ里ナリコノ歌ハコノアタリヲ汎ク指テふる里ト云ナリ元來

題詠ナレハ何レノ邑ト指定メタルニ非淵ハ行宮ノコチ援テソノ跡ナド云ハイトセバキコ也コノ一山ニ限レハ更ニ搦衣ノ所ヲ別ニ求メテ何カトソノ論長シ

南京廢スレハ奈良近旁ノ諸邑ミナ古里トナルベシソレヲ奈良ト蜻蛉野ヲ限リテイフハイト狹キコ也サテ今京ノ人トテ作者ヲ請ハ誣ナリ元來題詠ナレハ何レ邑ト指タル處ハナク汎ク芳野ノ麓近邊ノ古里ヲ云ノミ名勝顯ナラヌ處ハ地名モ歌ニ入ラズ人ハシラヌモノ也ソレニ強テ地名ヲ求ルハ愚ナリ

又按ニ古今ならの京にまかりける時にやどりける所にてよめる 是則

こよしの、山の白雪つもるらしふるさどさむくなりまざるなり

此歌ノふるさどハ即奈良ナリ吉野ハ少シ隔リタレド寒氣ニ付テ里量リテヨメル也サテ雅經ハ右ノ歌ヲ取テ搦衣ニ轉シヨメル也實景ニ非ハふるさどヲ奈良ト定メタルニモ非又吉野山ハ隔リタレト高山ナレハソノ方角ヨリ吹來風ナレハ山の秋風モ苦カラズ然レハ奈良ニ居テモ詠ベキ歌也ふるさどヲ奈良ト見テモヨキコ也山ノ遠過タルト云難ハナカルベシ元來作者ノ心ニ定案ナキコチ後人ノ種々迂怪ノ解ヲ付ルハ愚ト云ベシ
コノ歌風寒ケレハ婦女ノ心急キノ衣ヲ搦ノ意モアリ古里ノ景氣イト寒ケニテ衣ヲ搦聲モ聞ユルト也砧聲ニテ寒聲ヲ増ノ意モ無コハアラテ砧聲モ寒聲ノ一物ナレハさむくヲ引拔テ砧ニ授ルハ當ラズ

おふりなくうき世の民におほふかなわがたつ袖に
すみそめの袖 千載 題志らす 悠園

コノ歌ハ初テ叡山ノ貫首ニナリテ傳教ノ跡ヲ繼タルヲ述タル也

おふけなくハ俗言ノ寛泰也無徳ノ身ニシテ自謙遜ノ意ヲ帶タリ

改觀抄云おふけなくハ大氣といふ心なりなくはそへていふ詞無の字にあらすあらしきことをあらけなきといふ
かとし又云大膽といふかとしコノ解當レリ淵ハ此ヲ非ノ負氣無ノ説ヲ出セリ此ハ大ニ誤

註ニ引タル三藐三菩提ハ常ノ音コトハヨム巨サマクサボダイトヨムベシ今僧ノ誦經ニカクヨメハ古ヨリノ
ナルベシ此コトハ怪語ノ怪モ少シハ減ズベシ

木ノ茂リタル山ヲ袖ト云故ニソノ木ヲ取テ袖木取ト云ソノ木ヲ斬人ヲ袖人ト云也傳教ノ歌ニわかたつ袖ト云

ハ吾居處ノ山林ト云コトニテ即新建ノ寺ヲ指ナリ此ハ地名ニナルベキモノニハ非ソレテ地名ト定メテ詠タル

ハ例ノ慈圓ノ我儘ナリ俗説ニハ袖ヲ斧ノコト思ヒテ新建ノ初ニ袖ヲ立ルナド云ハ妄説ナリ袖ハ漢ニハナキ文
字也

墨染の袖ハ住初チカケタリコノ度天台ノ貫首ニナリテ此山ニ住初ル意ナリカクイヒカケテ又イヒツメタルハ
賤キ姿ニナルベシト疑フ人アルベシサレドソノ賤ガコノ僧ノ平日ノ手段ナレバイカハセソ

前ノ註ニ千載集及ヒ諸記ニ据テコノ歌ヲ任座首ヨリ前ノ歌也トイヘリ證據明カナレバ違フアルマシク見ユ然
レモソレニテハすみそめノ句力ナシ今按ニ凡大寺ニハ住持堅固ノ時カチテ法嗣ノ料ヲ定メ置呼テ後住ト云住
持死去スレハ後住即住持トナリテ一山ノ法務ヲ掌ルコト常ナリ僧官寺職ノ給旨ハイマダ下ラズトテモ法務ハカ
ハルコトナシコノ給旨ナトハマコトノ儀式ナレバ外ノ事ニテ數年延引ストモ苦ムコトナシ小キ寺ハ本寺ノ許容ニ

テ嗣モノナレド大抵カチテ後住ト定リタル身ニテ先師ノ讓狀ダモアレバ直ニ住持トナリテ一寺ヲ領シサテ命
ヲ本寺ニ請ナリ本寺許容ノ文書ハ延引スルモ事ニ滯ルコトナシ慈圓モト貴家ノ子コト座首覺快ノ高弟也學才ノ
譽モアレバ疑モナキ法嗣後住ナリ然ハ覺快死後ニハ直ニ一山ヲ領シタルハ疑フベクモナシ權僧正座主ノ儀式
ハ幾年延引スモ事ニ障ルコトナシ只今ノ將軍宣下ノ類ト知ベシコノ時朝家事ムツカシキ折カラナレバカハル閑
事ハ延引スベキコトニカクニコノすみそめの袖ヲ活カノ解ベシ

花さそふ嵐の庭の雪ならてふりゆくもの
わか身なりけり 新勅選 落花をよみ侍りける 西園寺入道前攝政

コレハ言掠メノ甚シキ歌ナリ先花ヲ雪ニ見立テ其等ニヨリテ吾身ノフリユクヲ歎クトハアマリニ輾轉シタル
コト也

コレハワロ歌トスベシモシ女ノ口ヨリ出タラバイトヨキ歌トイフベシ

コレハ述懐歎老ノ歌トスレバヨシ落花ト云題ニテハイカハアルベキ花ニハ賞モ惜モナク只假物ニナル故ナリ

こぬ人をまつほの浦の夕なさにやくやもしほの
身もこかれつゝ 新勅選 建保六年内裏歌合歌 定家

コレハ我女ニナリテ詠タル歌ナリ掠タリモ苦カラズ

やハ也ノ意ニテ常コ用ルコ也別ニ解ニタラズ

もしほの身モトツキタル處ニ説々アルベシコレハもしほのこがるト云テ質ニソソノ間ニ身モ二字ヲ插入レテ歌トナセル也例ノ掠メ詞ノ巧チ出マタルナリノハこかれヘツキテモハ鹽ニ對ノイフ也淵ノよノ解如ノ解ミナ當ラズ

今鹽ヲ燒ニハ海濱ノ地ヲ耕ソソノ砂ヲヨクナラシ溝ヲツケテ潮ノサシ入ヤウニ構ヘ砂ノ上ニ潮水ヲ打カケルコトヲ日ニ乾シ又打チ又乾シサテコノ砂ヲ木ノ末モテカキアツメ土ノ窟ノ如キ物ニ運ビイレ又潮水ヲ注ギ灰汁タルヤウニスレバ下ノ穴ヨリ濃キ水流レ出テ落ルチ土ノ釜ニイレテ下ニ火ヲ燃ノ煮ハソノ水白キ鹽トナル昔ハコノ砂ノ處ヲ海濱モテナセル也作法ハ大抵同カルベシ故ニ藻鹽燒トモ藻鹽垂トモ藻鹽草搔アツムルトモサマシク縁語アル也燒モノハ鹽ナリ薪ニ非

位署題名コノ卷ナルハ後人ノ所爲ナレバイカナル誤アリト論ニタラズサレド只コノ權中納言ニツキテ怪ム人多ケレバ序ニイフ也此ハソモイツノ比ヨリ誤來ニケン今ノ世ニテハ當官コテ幾年ヲ經ルモ常コ權ノ字ヲ用ルコトナレリ此ハ位記宣命公卿補任ナドニ泥ミテヤ起リケン我朝ノ權官ハ唐ノ試官ニ似タリ並ニコノ職ヲ重シクヤスシハ補セザルノ義也試官トハ譬ヘハ著作郎ヲ補シタルニ任官ノ初ハ試著作郎ト署ス滿歳ニ至テ過失ナケレバ試ノ字ヲ去テ署スコノ時ハ別命ナシ位記告身ノ類ハ初年ニ出ルモノナレバ多ク試ノ字アリ權官モコノ例ナルベシ大中納言初年ハ皆權官ナレバ位記宣命權ノ字アリ公卿補任モ初年ノ處ヲ記スモノナレバ必權ノ字アル例也サテ滿歳ニ及テ權ノ字ヲ去コト忘テソノ後常ニ權ヲ署スルハナソノ右職ヤ日本史ニサヘ撰者校者

並ニ權中納言ト署マタリソノ外ハ言ニモタラズ

試モ權モ官ニヨリテ例アルト也諸官皆然ニハ非

コノ歌ニ難ハナケレバ次ノ風をよクニ比セバインクヲバカリ劣ルベキ

風をよくならのを河の夕暮ハ御被そなつの
志るしなりける 新勅選 寛喜元年女御入内の屏風に 冢隆

風をよくと櫓ノ葉ニ言カケタレドならの小川ハ水名也今下加茂ノアタリニテ加茂川ヘ流入小河アリ土人はならの小川ナリトイフ真偽ハシラズ

六帖ニ御被するならのを河トミエタレバ水名ハ決定セリ後拾遺ノ惡歌ハサモアラハアレ

御被そトハコノ屏風ノ繪ニ被申チ立タルニテイヘリ志るしハ冷標チ假テ云ナルベシ

涼ノ字秋ノ字ヲ用ヒズノ冷氣襲人ト云ホドニハヨクヨミ玉ヒケルカナモトヨリ此ガ趣向ニテモアルベシ
風をよくならハ言掠メナレド時世ノ風トハイヒ又少ノコトナレバ歌ノ疵ニハアラザルベシ

人もおし人もうらめしあちきなく世を思ふ故に
ものおもふ身は 續後選 題えらす 後鳥羽院

兩ノ人ノ字並ニ在朝ノ公卿以下チ指ナリ萬民ニ及ブコトニ非帝ノ尤憎ミ怨ミ玉フハ北條ハ第一ナレドコノ歌ハ

ソコノコトニ非當時北條ニ阿黨ノ君ヲ惱ス者朝廷ノ間ニ半ナルベシ故ニ帝ノ愛憎ハ半ナルベシ

わちさなくハ無狀ノ字ヨク當レリ無爲モ略近シ無道無端ハ皆當ラズ無狀ハわけもなきト云フ也無爲ハ無益ナルコト云コノ句ハ下ニツ、キテ世ヲ愛ルニツキテ無狀ナル物思ヒチスルソト歎キ玉フわちチ味ト思フハアシ、注味氣無ハ大ニワロシ且わちさなしノ語ノ出處シレザレバシヌニテモスムベシ但ソノ詞ノ意ヲ得テ歌ヲ解テヨカルベシヲレヌコトヲ鑿求テ詞ノ義ヲ失ヒ歌ノ意ヲ傷ハヨカラヌコト我ハ思

氣ノ字古ヨリケトコソハヨメレキト漢音コテヨムコトハソノ例ナシ古學家ニハイカナル證アリヤチボツカナシ註ニ又にかくしに似たりト云ハ心エズ苦ハ味ナリ苦味アルチ無味ニ通ズベキヤハソノ説矛盾ト謂ベシ

世俗憂苦ニセマリ或ハ妻子死盡シタル類氣勢ナク萬ハカナク思フ者ハ世をわちさなくおもふト語ルナリ此ハ當ラヌ言ナレド誰モく聞ナレテコノ俗語ガ先入トナリテ胸中ニアル故多ク歌詞ヲ謬解スルナリコノ俗語ヲ離レテヨク見ベシ

愛ハメヅル義ナレトおしむト訓ズいとおしむモ同借ト同訓ニテ意ハ替レリ漢文ニテ愛憐ト借客トハ別義ナレト又愛惜ト連用レバ惜一字ノ義トナル又愛ノ一字ニテ全ク惜ノ義トスル處モアリ宋明ノ俗間ニ娼妓女僮ノ名ニ惜ノ字チ多ク用ユ惜々婆惜ノ類也此ハ全ク愛ノ義ナリ元來借ト愛ハ似タル意アル也

おしハ愛ノ字ニ叶ヘリうらめしハ憎ノ字ニ叶ヘリ並ニコノ歌ノ上ニコトイフ也通解ニハ非吾寵幸ノ人チ升進サスルコトモ心ニ任セズ卑位ニ捨置ハ甚惜ムヘク思フハ愛ノ字チ兼タリコノおしニ叶ベシヤ

物思ふノ物ハ物らさノ物ト同シスベテ愛思ノ上ニアルコト也ソノ物ノ字チ引出ノ世を思ふノ世ニ對シタルハ少シ心ユカヌコトナリ本ノ兩ノ人ノ字ハカアル語也末ノ世モカアリ只物ノ字甚力ナシ下ノ思ノ字ニ逃籠ルベクミユ末ノ世物ニテ上ノ兩ノ人ニ應接スル詞ナレバカク力ナキ物ハ用ガタシヤ

第四句ハ字餘リニアラズ末ノ句ハ字不足ニ似タリ歌ノ疵トモ云ベシ
王室ノ興衰天下ノ治亂ニ心ヲ勞スルトハ帝王ノ御身ニテハ勝レタルコトナレト只コノ君ノミハ甚チボツカナシ凡時チ量ラズ徳チ量ラズハ大業ハ興ルモノコハ非蓋コノ時百官ノ内ニテ御心ニ叶タル人々ハイカデ升進サセシ御心ニ叶ハザル人々ハイカデ貶黜セント思召トモ少シモ御心ニ任セズコハイカコトノ鬱憤ヨリ出タルコトノ歌ナレハサシモ褒賞スベキコトナシ世を思モ天下ニカ、ルコト非サバカリ重キコトモ非今零落人ノ身チ歎キ先代ノ盛時チ慕フテ常ニ物事心ニ任セヌタビゴトニ憤リテ世ガ世ナラバト云ナリコノ世ノ字ト同シ大抵御身一人ノ上ニアルコト也ソモく世事萬一御心ニ任セタラバイカバカリノヨキコトアラン定メテ龜菊ニ加恩チ賜フベシ其他モコノ類ナルベシ感傷スルコト然ルニ世を思ふチ字内萬民ニ及ブ仁心ナリト人々誤リ解ノ誤テ感傷スルソイトチシキコノ君ノ亡國ノ主タルコトナシラズカシ

大農ノ素封ナルモノアリコノ主人幼弱ノ時田産ハ多ク人ニ奪ハレ又年々衰ヘユクニ大ニ憤激ノ一朝悉ク餘産チ賣リ其金チ齋テ堂島ニ趣テ賣買チナズ月チ踰ズノ其金盡テ露バカリモ餘物ナク成果タルハマサニコノ帝ノコナルベシコノ後モカ、ルコト幸ニ成就シタルコトモアリケレド程ナク氷解ケテ元ノ水ニナリストニカクニコノ事ハ帝ノ徳ニアルコト也徳チ量ラズ時チ量ラズノハ事カナハヌコト

時モ精ク思フベシトヒ彼ノ時去テモ我ノ時イマダ來ラザレバ大事成ラズ我ノ時來テモ彼ノ時去ザレバ亦成
ラス

百敷やふるき軒端の志のふにも猶餘りある
むかしなりけり 新後選 題ふらす 順徳院

コレモ掠メ歌ナリヨキコトニ非

百敷トハ疊百枚ヲ敷ツメル大殿ナリ必敷ヲ限ルコトモアラズ大殿ノコト云ナリ

壁五間横十間ナレバ百疊敷也甚大ナルニモ非今ノ紫宸殿ナドモ大抵カ、ルモノナルベシ故ニ帝王ノ居ヲ稱ノ
ハ百敷ト云也古歌ニハ常ニ百敷の大宮トツケタリ大宮ヲ除テ百敷トノミ詠ハ中古以來ノコト也古義ヲ失ニ似
タレトハイハレズ萬葉ニ敷ノ字ヲ用ヒザリシトテ外ノ解ヲ求ルハアジ、古抄ニ百官ノ座ト云モ的當ナラ
ズ百ノ字ニ泥ミタリヤ

宮ト殿トハモト替レル文義ナレド中古ヨリ混同ノ用ル也文義ノマ、ナラバ百敷ノ大殿トコソ云ベケレ萬葉ハ
古キ物トイヘド又其古キヲ失フハ一ナリ

百疊ノ殿ハ大ハ大ナレド豊臣氏ノ千疊ニ比セバ何バカリモナシ又大ナル佛宇ニハ百疊二百疊ノ佛殿方丈ハイ
シラモアレバ帝王ノ居ニハカクモアルベシ廣過タリトノ疑ハカツテナキコト也古ハ實ニカ、リシヲ以テ帝居ノ
定稱トナリシナリ中古大内裏焼失以後ハ里内裏トテ公卿ノ家ヲ轉ノ用タルコト多シ別ニ營構アリタルモ昔ノ影

モナカリケリコノ帝モ里内裏ニテ又衰微ノ最中ナレバ垣ノ毀タル處モアルヘシ字ノ傾テ苦ムシタルモアルベ
シ忍草ノ生タルモアルベシタトヒコノ草ハナクモ荒涼ナル處ニハ相應ノ草也歌ニ詠入ルコト何ノ憚アラソ
ヤ淵ハ今だにトテ疑ナクケタレド今ヨリハ衰微ノ甚シキヲ知ザルコトヤ今ハ反テメテタキ御宮居ニテ百敷ノ殿
モ實ニアリ拭ヒミガキテ忍草ノ生出ベキヤウナシヨロツ荒涼ノ氣象ハカツテナシ東人ノシラスコトゾ

志のふにもあまひあるトハ其思慕ノ憂ヲ面ニモアラハスマシト耐コトヘテ居テ忍トイフサテ忍耐テ居テモ叶
ハズ自ラ外ニアラハルチ餘ルト云也忍ひあまひト同シ詞ナリ歎息ノ聲ニアラハル、モ涙ノ落ルモ皆餘リテ出
ル也淵ノ戀たまふにも餘りありトイヘルハ心エズ戀ニ餘ノ有無ヲ論ズベキヤハ

コレハ御在位ノ時ノ御歌ナリ百敷ソノ證ナリ在位十年コノ歌ハ季年ニ近カルベシ承久二年大亂ノスコシ前コ
ノ讓位アリ皇太子懷成立玉フ程ナク亂起リテ北條ノ計ヲヒコテ三上皇ヲ遷シ新帝ヲ廢シ九條廢帝後堀河帝ヲ立タ
ルナリコノ間ノ事註ニ前後ヲ差ヘリ辨スルコトタラスコトナレド序ニ云

コノ歌女流ノ掠メ歌ナレド時世ノ風習ナレバ咎ムベシモアラズ先ハ感情深キヨキ歌ト云ベシ

又末ノ昔モ掠メ歌ナレバコソ疵トコソイハチ男歌ノ正風ナラバ用ガタキコト也カノ忍フニ餘ル物ナラバ聲カ色
カ涙カ忍ヒカチテモアラハル、物チ出スベキコト也昔ヲ慕フテ悲ムチ人ニハミエツトスルガ即忍ナリソノ忍
コ餘ル昔トハイカナル昔ツヤ女流ニテハ慕モ悲モ戀モモロ、愛思ニカ、ルコト皆忍ノ一字コト云掠ルナレ
バ文義ヲ問フナシ故コ女流ニテハコノ昔ニ疵ナシ男歌ノ正風コトハ大ナル疵コソ然ラバコノ歌タイカニ改メ
ナバ正風ニ叶ベキヤト或ノイヒケレバソレコソイトホケナキコトナレド巧拙ハサテチキテ掠テ去ナラバ

百歌やふるき軒端の忍草まのふにあまるわか涙かな

カクテハ男歌トナルベシ昔俊頼朝臣ハ歌ヲ二體ニ詠シトソノコロ評アリシハコノ男歌女歌ノワカナニヤアリケン

關白鷹司公、進政聞履軒先生有百首贅々之撰、使其臣革島兵庫借之懷德堂、曩日水哉館亡此書、而無副本、堂主知予藏一本、請借之、予即出而付之、公喜之、一摺紳覽之曰、是履軒之手書也、公愈珍之、予所藏、先生門人竹島立雪所謄寫、立雪學先生之書、而頗能肖焉、所以爲先生之手書耳、後兵庫諭曰、殿下甚欲之、吾子盍獻諸、吾爲謄一本、以償之耳、蓋殿下之意云、予曰、唯所命、但小臣有所願、所賜償本之餘白、殿下手書所賜之故、以賜、則草茅之榮、何事如之、不敢請耳、久而不果、因詰之、則曰、殿下既還下也、適細川侯東下、往謁于伏見、時與其吏語、而及此事、吏強借而視之、侯則侯持而上道也、所以緩稽耳、幸且待之後、久而始得還也、抑書之可珍、不待言、但是弊敗之冊子、再觸于尊貴之手、不亦奇矣乎、所以記也。

含章齋主人識

右仙臺藩中洲清水翁遺藏百首贅々後序、翁名原、字士進、含章齋蓋其別號云、

壬辰立秋

黃裳隱者識

懷德堂遺編目錄

維昔我懷德書院撤帷圖籍散亂先哲遺書亡蓋多矣書目不備莫足徵者今茲首春余聚書于京畿得二三書目稽諸舊藏遺本逸書篇目可得而知也於是拾遺補闕協厥異同爲懷德堂遺編目錄凡六十九篇無書者三十六篇疑則闕焉明治壬辰六月癸巳中井生成文謹識

石菴先生著書殘編

中庸定本石菴先生說一卷已刊石本

萬年先生詩稿一卷未刊

蘭洲先生著書

蘭洲先生刪正日本書紀四卷未刊

非伊篇未刊

非物篇六卷已刊

非費篇未刊

承聖篇未刊

讀史訪議未刊

萬葉集詁未刊

古今通二十卷未刊

勢語通內卷四卷未刊

源語詁三卷已刊

源語提要未刊

鷄助篇二卷已刊

質疑篇一卷已刊

瑣語二卷已刊

蘭洲先生茗話三卷未刊

和歌新題百首未刊

喻叢一卷未刊

駁太宰四十六士論未刊

文章廻瀾一卷未刊

菴菴先生著書

葬祭私說一卷未刊

とほすかたり一卷已刊

詩文集未刊

和歌和文集未刊

春のことば一卷未刊

新題和歌未刊

竹山先生著書

易斷五卷未刊

書斷未刊

詩斷未刊

禮斷未刊

四書斷未刊

小學斷已刊

近思錄斷未刊

唐鑑題一卷未刊

非徵八卷已刊

左傳比事蹄三卷未定稿

尙書管見一卷未刊

逸史十三卷已刊

詩律兆三卷已刊

奠陰集二十卷未刊

奠陰略稿一卷未刊

東征稿井西上記一卷已刊

西岡集一卷未刊

芳山紀行一卷未刊

閑距餘筆一卷未刊

東稽四卷未刊

子華孝狀一卷已刊

草茅危言五卷已刊

國字牘八卷未刊

裝發篇一卷已刊

奠陰自言未定稿

奠陰詩話未定稿

報姦錄一卷未刊

希簡錄未定稿

災後莖言一卷未刊

東游雜誌未定稿

文履一卷未刊

續芳原物語一卷已刊

蕉園先生著書

蕉園先生首書四書未刊

蕉園先生首書五經未刊

雕蟲篇一名二十賦二卷未刊

騶騶養二卷未刊

甲越外史二卷未定稿

津問一卷未刊

炎窓代睡一卷未刊

杞憂漫言一卷未刊

壘集壘泉先生輯

碩果先生著書

澹集寒泉先生輯

水哉館遺編目錄

昔者吾履軒先生刪詩正七經治八史二子十二書次禮樂刑政軍法醫術音韻曆數之言自水哉館撤帷後集其諸書在懷德書院書庫懷德書院撤帷先君子既沒傳於余蓋多闕後頗獲今所存凡八十五篇余閱天樂樓遺書目有錄無書者二十二篇有書無錄者五篇更覽履軒小乘所載及他二三目錄較有不同於是整齊諸本為水哉館遺編目錄凡百一十篇幽人先生反古錄 袖園先生遺稿附于後 明治壬辰七月壬戌中井生成文謹識

七經逢原共三十二卷 未刊

論語逢原四卷

論語題二卷

周易逢原三卷

孟子逢原七卷

孟子題二卷

尙書逢原一卷

七經題共五十六卷 未刊

七經題略共十九卷 未刊

古詩逢原七卷

周易題三卷 并附卷

易題略卷三

古詩得所編一卷

尙書題六卷 并附卷

尙書題略二卷

古詩古色一卷

詩題七卷 并附卷

詩題略三卷

左傳逢原六卷

左氏題十五卷

左氏題略三卷 已刊

大學雜議一卷

禮題二十卷

禮題略三卷 已刊(活版)

中庸逢原一卷

學庸題一卷

中庸題略一卷

論語題略二卷

履軒先生題小學二卷 已刊

弊帚季編一卷 未刊

孟子題略二卷

履軒先生題古文真寶前後集三卷 未刊

履軒髦言二卷 未刊

典謨接一卷 未刊

履軒先生題世說新語補十卷 未刊

履軒古風二卷 未刊

中庸天樂樓定本一卷 未刊

履軒先生題天經或問三卷 未刊

履軒古韵一卷 未刊

履軒先生考定伏生尙書一卷 未刊

履軒先生題楚辭六卷 未刊

諧韻珣璣一卷 未刊

履軒先生傍註梅賾古文尙書一卷 未刊

履軒先生題茶經二卷 未刊

傳疑小史一卷 已刊(活版)

履軒先生題國語五卷 已刊

履軒先生題伊勢物語二卷 未刊

枕上雜題一卷 未刊

履軒先生題戰國策十五卷 未刊

履軒先生題古今和歌集二卷 未刊

洛汭發囊一卷 未刊

履軒先生題史記二十七卷 附刊補二卷 未刊

履軒先生題大和本草十卷 未刊

深衣圖解一卷 未刊

履軒先生題漢書五十卷 未刊

履軒先生題毛詩品物圖攷一卷 未刊

詰辨一卷 未刊

履軒先生題後漢書六十卷 未刊

履軒先生題詩經名物辨解一卷 未刊

絕句逢原一卷 未刊

履軒先生題三國志四十卷 未刊

履軒先生題度量衡考二卷 未刊

繼聲篇一卷 未定稿 未刊

履軒先生題晉書五十三卷 未刊

通語三卷 已刊

足利史草本二卷 未刊

履軒先生題五代史十卷 未刊

水哉子三卷 未刊

屬辭連珠左傳年表合本一卷 未刊

履軒先生題老子二卷 未刊

履軒弊帚一卷 未刊

和漢年表 內外二卷 未刊

履軒先生題莊子十卷 未刊

弊帚續編一卷 未刊

服忌圖一卷 未刊

- 治水潤論一卷 未刊
 河圖累棊一卷 已刊
 東西周辨一卷 未刊
 履軒雜說彙編二卷 未刊
 履軒臥友一卷 未刊
 簡諒篇一卷 未刊
 六書要語一卷 未刊
 履軒外集 月可錄 年成錄 二卷 年成錄已刊(活版)
 有間星三卷 未刊
 浚河茅議一卷 未刊
 恤刑茅議一卷 未刊
 均田茅議一卷 未刊
 攘斥茅議一卷 未刊
 茅議雜篇一卷 未刊
 老婆心一卷 未刊
 華胥國物かたり一卷 已刊
- 華胥國歌合一卷 未刊
 華胥國新曆一卷 未刊
 華胥嘯語一卷 未刊
 履軒越吟三卷 未刊
 風懷百首一卷 未刊
 昔の旅一卷 未刊
 古今二微一卷 未刊
 古都多飛一卷 未刊
 盛議一卷 未刊
 秋露一卷 未定稿 未刊
 左九羅帖一卷 未刊
 附畫臚一卷
 百首贅々一卷 新刊(活版)
 唐詩選國字解一卷 未刊
 述龍篇一卷 未刊
 越祖弄筆一卷 未刊
- 刀甲辨一卷 未刊
 履軒數聞一卷 未刊
 經界圖一卷 未刊
 辨妄一卷 未刊
 水哉館集三卷 未刊
 和文集二卷 未刊
 附錄
 幽人先生反古錄 寒泉先生輯 一卷 未刊
 袖園先生首書小學二卷 未刊
 袖園先生首書古文眞寶前後集二卷 未刊
 袖園數記一卷 未刊
 文馬篇一卷 未刊

明治二十五年十一月十四日印刷
 明治二十五年十一月十五日出版

正價金貳拾錢

著者

故中井履軒

印刷行兼者

中井木菟麻呂
 神田區小川町五十七番地

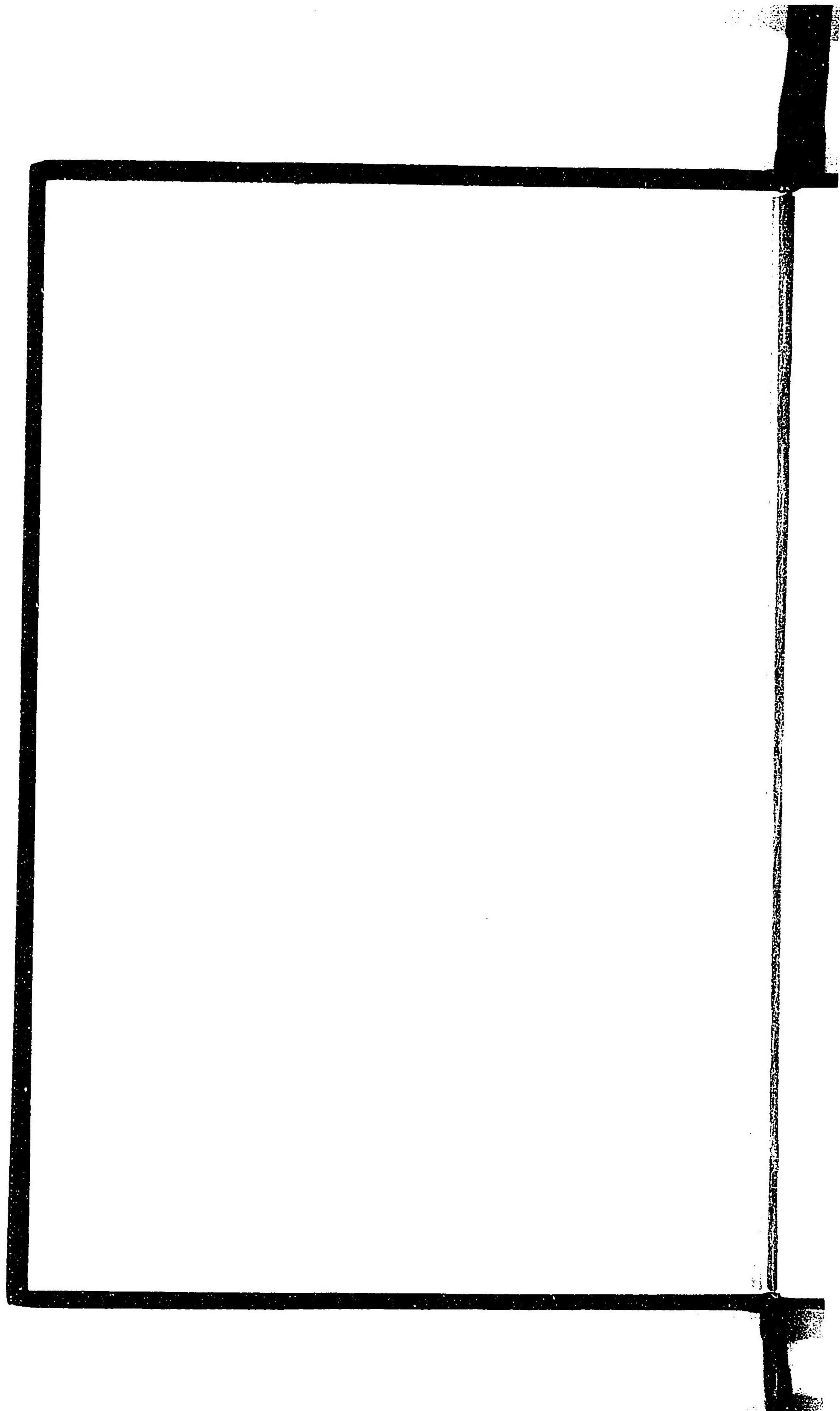
版權所有

發兌元

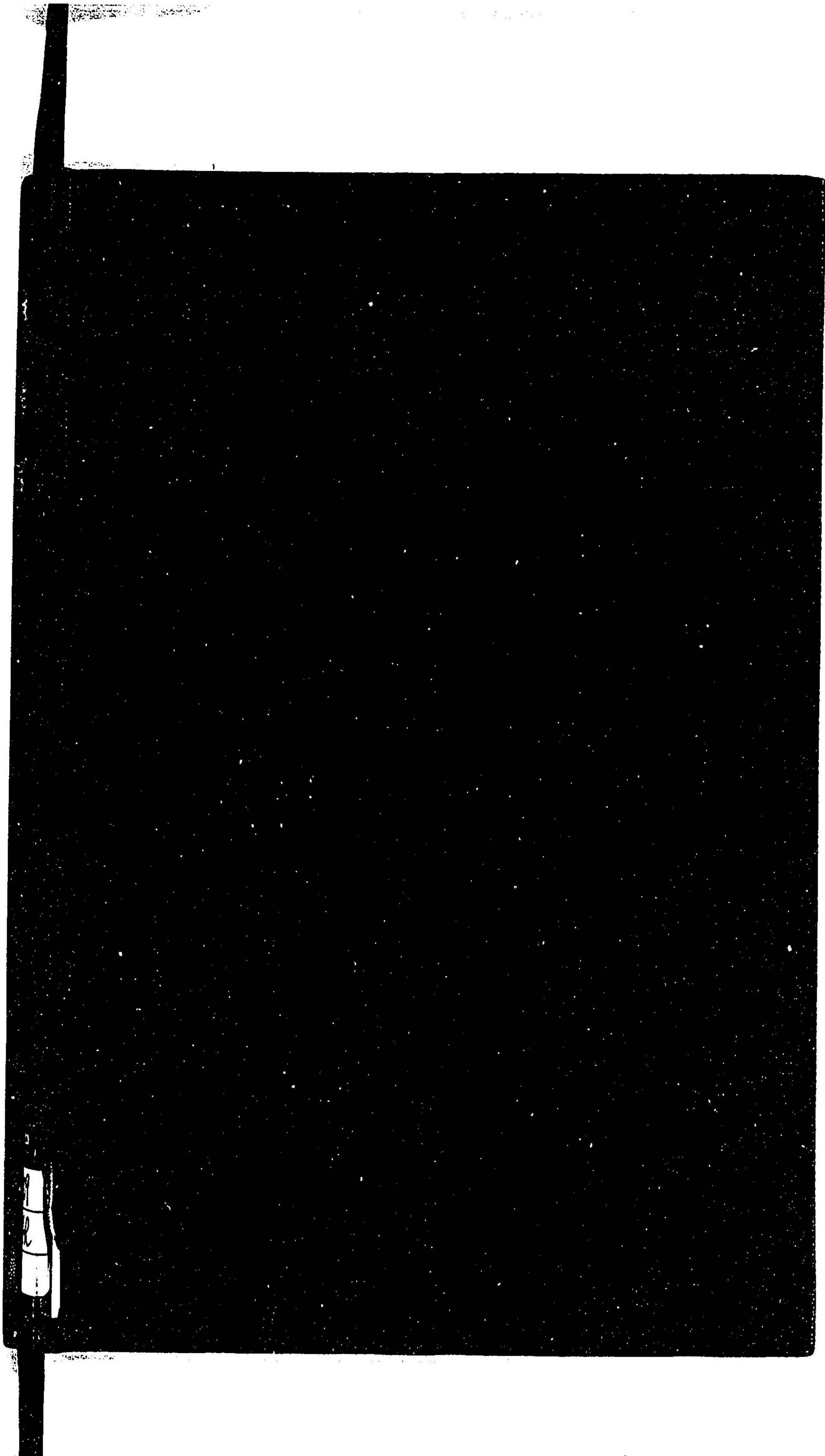
東京日本橋區本石町三丁目十六番地
 博文館

92

IT
5/2



Vertical text or markings on the right edge of the page, possibly a page number or a reference code.



911.109

N341h

086478-000-2

911.109-N341h

百首贅々

中井 履軒/著

M25

DBD-1329



